私は何ぞや

深海魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私は何ぞや

【Ｎコード】
Ｎ８２２２Ｕ

【作者名】
深海魚

【あらすじ】
司馬懿に転生した女オリ主が恋姫の世界で生きた証を残そうとする話です。

※処女作です。誤字・脱字、矛盾点がある場合、報告していただければありがたいです。

プロローグ

『人生は一冊の書物に似ている』という名言があるが自分の人生を一冊の書物に表したらどうなるのだろうか？少なくともベストセラーは天地がひっくり返ってもありえないだろう。

そもそも一年を１ページとしたら全百ページとして文章が書き込まれているのはたった１６ページだ。
空白が多いと言う話どころではない上、書き込まれている内容も平々凡々では書物としては失格だろう。

しかしこれから化けるかもしれない？それはもうありえないだろう。
私の体は血溜まりの中で倒れている。

なぜこうなったのか、トラックが自分に向かって猛スピードで突っ込むということはまず起こってないし、知り合いが刺されそうな所を見つけ、庇って殺されたとかますますありえない。

階段で足を滑らして落ち、頭をかち割ってしまった。ただそれだけ。人生の最後にしてはあまりにもあっけなさ過ぎる。

せめてお涙頂戴的な最後がよかった。誰かに抱きかかえられながらとか不謹慎ながらもドラマチックな最後とかがいい。恋人だとなおさらいい。それなら自分の人生に少しは花が出ただろう。

私は１６年という人生の４分の１にも満たない短さで社会に貢献できぬまま親よりも先に死に、親不孝者という烙印を押され、未練をこれでもかと残しぽっくりと逝ってしまうのだと長々と考えてい

たらだんだんと眠くなったので目をつぶることにした。

と、思ったら私は神様に愛されているらしい。

光が見えたのだ。

まだ生きれると歓喜し光に向かいがむしゃらに手足を動かす。思うように動かせない。いったい何日のあいだ寝ていたのかとか、今度からお賽銭は奮発しようとか、リハリビするのかななどと考えるうちに光は目の前に来た。

そしてついに光の下へ出たとき、私は生きている！女性としての羞恥心を感じさせぬほどの雄たけびを上げた。

そして声が聞こえたのだ。

「おめでとうございます！とても元気な女の子ですよ！」

一、　転生と自堕落

「烏涙(うるい)！遅いわよ！」

猫耳のようなフードを被った女の子が私に大声で言う。少々待たせてしまったみたいだ。

「ごめん、桂花。ちょっと先生の話が長引いてね。」

と言うと桂花が私をジト目で見てきた。

「悪いと思うのなら急ぎなさいよ。それに、大方真面目に勉強しなかったのでしょう？」

「勉強じゃなくて今回は鍛錬よ。まあ真面目にしたとは言えないけど・・・」

平然と言うと大きくため息を吐かれた。そこまで呆れなくでもいいじゃない。

「呆れるわよ。アンタ頭がいい上に身体能力も悪いわけではないでしょ。まさに才能の無駄使いね。何の為に生きてるの？」

毒舌を吐かれるが気にしない。これもスキンシップの一つ。伊達に桂花と長年親友をやってきたわけではない。

「さてね、それより早く甘味処に行きましょうよ。命(みこと)を待たせたら悪いわ。」

そう言ってそそくさと歩き出す。

「ちょっと、私は待たせてもっ・・・て待ちなさいよ！アンタ絶対に痛い目見るわよ！」

そんな事はありえないわね。だって今の私は天才。司馬懿仲達だもの。

◆

ここで説明しましょうか。私の名前は司馬懿、字は仲達。そう、あの三国時代の人物でも有名な人物よ。だけどそれは半分違うのよ。

単刀直入に言いましょ。私は死んで転生したの。おまけにタイムスリップというおまけつきで。本当に驚いたわね、気づいたときは。

あの時、光源にたどりついたとき、また寝てしまったの。そして目が覚めたときに見えるのはドアップの女性の顔。

その女性は私を抱きかかえて

「あなたの名前は司馬懿、真名は烏涙がいいわね。どう？いい名前でしょ。」

と言い放った。当然私は混乱。この女性は勝手に私の名前をつけてきたのだ。真名という意味の分からないのも一緒に。私にはちゃんとした名前があるというのに。

まあ、しばらくしたら自分が赤子になっていることに気づいてこれはもしや転生では？と思い始めた。ネットでＳＳをよく読んでい

たので割りと早く気づいた。結構好きなのよ、二次創作。

しかし死んだことに変わりはない。ショックが大きいというのに回りは待ってはくれない。母らしき人に抱きかかえられて外の景色を見せられた。

視界に広がるのは街。だがただの街ではない。まるで・・・そう、ゲームやテレビで見たような大昔の中国のような街なのだ。

ちなみにショックのせいだろう。私に語りかけている母らしき人の言葉が日本語という事と自分のにつけられた名前が司馬懿という事にその時気づかなかったのは。

それから大体6年。私がたどたどしくも喋れるようになったときから始まった勉強と鍛錬漬けの
地獄のような日々のある日に突然に母様に二人を紹介されたのは。

猫耳フードをかぶった荀?と名乗る女の子と、白い髪の毛に赤い目、恐らくアルビノであろう
郭淮と名乗る女の子の二人を。

その時に気づいたのよ。司馬懿である私を含めて三国志の男性であるはずの人物がすべて女性に
なっていることに。

なに?先ほどからの桂花や烏涙は何って?

それは真名と言うの。簡単に言うと絶対の信頼を寄せれる人のみに呼ぶことを許される
神聖な名前らしいの。ちなみに相手の承諾無しに真名を呼ぶと殺さ

れてもおかしくないらしいわ。

それで烏涙というのが私の真名で、荀?は桂花で郭淮が命。つまり私と桂花と郭淮の三人はそれほどに仲がいいということ。

私の説明はこれぐらいでいいでしょ。そうこうしてるうちに甘味処に着いたしね。

◆

「うわ～結構並んでいるわね。」

「アンタが遅れるからでしょ。」

そういって桂花はため息。幸せが逃げるわよ?

「とりあえず並びましょ。」

「ええ、当然あなたの奢りでしょ?」

は?

「何でよ!ただえさえ小遣い減らされてるのに!」

「小遣いを減らされるのはアンタが不真面目だからでしょ。」

うっ、それを言われると辛い。

「それに前、今度遅れたら奢ってもらうわよといったじゃない。それとも烏涙、アンタ命の楽しみを奪う気?」

「はいはいわかりました私が払わさせていただきますわよ。・・・最悪。」

「アンタの自業自得でしょ。」

ごもっとも。

◆

「命、来たわよ。体調はどう？」

「うん、結構大丈夫みたい。」

そういった後にけほっと咳を一つ。この子が郭淮で真名は命。アルビノ特有の色素の抜けた白い髪と白い肌、そして赤い目が特徴の病弱っ娘。

だけど病弱という割には大きな弩砲（バリスタ）を軽々と扱えるという病弱とは思えない特技を持つ恐ろしい娘。この世界の一部の人達は力がおかしいと思う。

「聞いてよ命。桂花ったらおみやげを私一人に買わせたのよ。」

「ちょっとなに言ってるのよ。アンタが悪いんでしょ。」

そして私と桂花の言い合いをしてそれを命が楽しそうに見る。

何時も通りの日常。

前世より充実した毎日。

前世より身体も頭も良い自分。

最高じゃない。

だけどさまざまな歴史との違いがあるとはいえ、今は三国時代のほんの少しの時代。いずれ黄巾の乱が起こりそれがきっかけですぐにこの世は乱世となるでしょう。

だけど大丈夫。なぜなら前とは違い今の私は司馬懿。三国でも一二位を争うほどの天才の身体。さらに前世の記憶というアドバンテージ。

なら私の明日は約束されたようなものじゃない。

私は本当にそう思っていた。

だけどそんな自堕落の毎日を変える出来事が後に起こった。

その出来事は些細なこと。

だけどその出来事が確実に慢心だらけの私と実際には破滅的だった私の未来を変えたのだろう。

二、　買物と悪意

「はっ・・・はっ・・・はっ・・・！」

呼吸が荒い。胸が痛い。足が痛い。涙が出そう。でも足を止めてはいけない。

「桂花っ！命っ！こっちよ！」

曲がり角でとっさに二人の身を隠し、自分も隠れる。

そしたら男の声が聞こえてくる。

「アニキ～子供達を見失っただよ～」

「あのガキ、やたらとすばしっこいですぜ。」

声からして太った巨漢と背の小さい男だろう。

「大丈夫だ。まだ近くにいるはずだからな。デブ、チビ！手分けして探すぞ。せっかくの金づるだからな、絶対に捕まえるぞ！」

「わかったんだな。」「了解ですぜ、アニキ。」

足音が離れていく。どうやら運よくこちらのほうには来ないようだ。

「もう！・・・何なのよあいつら！」

「・・・っ！・・・っ！」

桂花が息を切らしながら叫ぶ。顔が真っ赤だ。対して命は顔が若干青い。ただえさえ命は病弱なのだ。あんなに走ったせいで喋ることすら難しいようだ。

このとき、私は毎日感じていた優越感と慢心は完全に無かった。

◆

私は桂花と命とのいつも通りの三人組で街を歩いていた。

「桂花ちゃん、烏涙ちゃん。どこの本屋に行く？」

命が私達に聞く。今日は命の調子がいいので三人で出かけている。

「そうね・・・まず西側の方に行ってみない？」

「ああ、あの小さめの本屋ね。なら昼食はその近くの水餃子にしない？」

「いいわね。命は？」

「僕も良いよ。あそこの水餃子好きだし。」

「きまりね。じゃあいきましょ。」

この世界に司馬懿として転生してからは本当に充実している。司馬家は名門の家柄だからなのか、屋敷の住み心地は現代の家よりもよく、料理はおいしくてさらにレパートリーも豊富だ。塩が足りな

いのが気になるが。

しかし全てが上回っているとはいえない。暑いときにはクーラーなんてないし、寒いときも当然ヒーターはない。まああまり気にしなくても大丈夫だった。

言葉はなぜか日本語なので気にしていない。だが字となるとなかなか思いどうりにならなかった。日本語になれている身としては、どうしてもこちらの字を覚えるのに時間がかかった。今ではあまりないが時々間違えたり忘れたりしてしまう。

夜は結構辛い。明かりが全くないのだ。日が沈みはじめると回りがどんどん暗くなり最後には何も見えなくなる。一応火はあるがそう何度も使えるものではない。となるとに夜はあまり行動できないので必然的に早寝早起きになってしまった。

そしてなによりもつらいのが娯楽の少なさだ。桂花や命と話すのは楽しいが、毎日会えるわけではない。母様には勉強と鍛錬を強要されているが真面目にしてはいない。当然それで暇を潰そうなんて考えない。

となるとのこるのは読書くらいだ。やはり現代ほどの種類はないが興味を引かれるのも多々ある。ちなみに一番のお気に入りはあの有名な孔子だ。

正直、最初はつまらないと思っていたのたが、これまた意外と面白い。伊達に現代まで伝わっているわけではないと思い知った。普段まともにしない勉強も、孔子を出されたときは熱心に取り組んだ。当然母様には飽きられたが。

まあともかく今では暇なときにはいつも本を読んでいる。なのでどんどん既読の本が量産されるわけでまたすぐに本を買うことになってしまう。

それは桂花と命も同様らしく、せっかくならとよく一緒に本を買いに行く。

「そういえば桂花と命は何の本を買うつもりなの？」

「私は曹嵩の娘が孫子に注釈を付したらしいの。孟徳新書ていう名前の本。気になったからそれを買おうと思って。」

「あっ、僕もそれ気になってたんだ。結構評判高いよね。」

曹嵩の娘というと・・・やっぱり曹操でしょうね。たしかそういうことをしてたとＷｉｋｉで見かけたわね。

それにしてもやっぱり曹操も女性なのね。

「烏涙はどうなの？」

「うわっ！」

気づいたら目の前に命の顔が。非常に心臓によろしくない。

「烏涙、アンタなに大きい声を出してるのよ。」

桂花がジト目で見てくる。この頃やたらとジト目を向けられる。

「いやごめん、考え事してた。」

うっかり考え事に没頭するところだった。桂花、悪いと思ってるから考えることなんてないほどに能天気のくせにだなんて言わないで。しっかり聞こえてます。

「それで烏涙は？」

「えっと、孟徳新書のことよね？私もそれを買おうと思っているわ。」

「なら僕たち三人買うなら三冊でしょ。三冊あるのかなぁ。」

「たぶん大丈夫でしょ。なければ貸し合えばいいし最悪、書き写せばいいわ。」

この時代では印刷技術が無い為、同じ本は大量にはない。なので本屋には基本的に一冊ずつしかない。どうしても手に入らない本もあるので貸し借りはもちろん、人によっては書き写すなんてこともする。

「書き写すのは嫌よ、私は。桂花じゃあるまいし。」

「とりあえず烏涙に貸さないことは決定ね。」

「うわっ桂花って器小さいわね。」

「ははは、その時は僕が貸してあげるよ。」

「ありがと、やっぱり命はだれかと違って優しいわね。」

「命、別にこんなやつに本を貸さなくていいのよ。」

まさに女三人寄らばという状況だ。いつも通りのはずなのに烏涙は少し違和感を感じていた。しかし彼女はまったく気にしなかった。

◆

「チビ、あいつらが標的か？」

男が三人いる。少々がたいのよい男と太った男、背の小さい男が話し合っている。

「はいアニキ。どれも親が金を、とくに黒髪のやつは名門ですから金は大量にあるはずですぜ。」

「しかもどれも上玉ときた。かなり高く売れるだろうな。」

「アニキ～、でもそいつらはいいとこの生まれなんだろ？なら危険だと思うんだな。」

「馬鹿だなデブは。捕まえたらこっちのもんだぞ。」

「そうだ、人質にすれば簡単に金が入るんだ。これほど簡単なことはないだろ。」

町の隅、人目につかぬところで男達の含み笑いが聞こえてくる。

彼らの目には烏涙達が映っている。

三、　危機と虚栄

「お嬢ちゃん達、一緒に来てくれないか？」

きひひひと男共の下品な笑い声が響く。

気分は最悪。久しぶりの三人揃ってのお出かけを邪魔されたのだ。

さっさと無視を決め込みたいがそれは出来ない。

「ねぇ、どうするのよこの状況。」

桂花が私達だけに聞こえるように言う。

彼女も機嫌が悪いのだろう。声色から怒気を感じる。

「囲まれちゃったね、僕たち。」

命は不安そうだ。心なしか、顔がほんの少し青い。

男共は三人で私達を囲むように立っている。

逃がす気は当然無いらしい。　大方、こいつらは私達を捕まえて親を脅して金を手にしようという魂胆だろう。

「私が合図を出したら裏道へ逃げましょう。裏道は入り組んでるから撒ける筈。その後、私の屋敷に行って警備の兵に報告しましょ。」

私の言葉に二人は小さく頷く。

「どうしたんだい？こそこそとして、早くお兄さんについて来てくれないかなぁ。」

どう見てもオッサンの顔でヒゲの男がぬかしながらこちらに近づく。

警戒している素振りは全くしていない。油断してる。チャンスだ。

いつも持ち歩いている護身用の大きな鉄扇を広げ、地面の砂をすくい上げ、そのまま前のヒゲ面に叩きつけるように砂を投げる！

「今よ！逃げて！」

私の合図と同時に二人は裏道へ逃げる。

私も続こうとした時、

「ざけやがって！ガキがぁ！」

とすっ　と左腕辺りから音が

「――――――ッ！！！」

声にならぬ叫び声を上げる。

左腕に短刀が深く刺さっている。

激痛が止まらない。傷口から短刀に血が流れ、地面に滴る。
目の見えないヒゲががむしゃらに投げた短刀が刺さったのだろう。
投げる際に切ったのか、ヒゲの男の指からは血が出ている。
私は左腕の痛みから逃げるように二人の元へ急いだ。

◆

「アニキ、大丈夫ですかっ！」
「くっ・・・目がっ・・・。」
「早く目を洗ったほうがいいんだな～。」
「それよりもガキ共はどうした！」
「へっへい！。奴ら裏道の方へ逃げやしたようですぜ。」
「裏道にか？ならいき止まりへ追いつめるぞ！」
「へい！」「わかったんだな。」

◆

なんとか二人と合流してすぐに物陰に隠れた。

男達のであろう足音が離れていく。

「烏涙ちゃ・・・！どうしたの、その腕！？」

命が私の腕に気づき、驚きながら聞いてくる。

「ヒゲの奴にっ、痛いっ…痛いっ。」

痛さのあまり涙があふれてくる。ひっぐ、ひっぐ、と嗚咽が止まらない。

いつもある自信が全く無い。あんなごろつき程度に、とただただ自分が惨めに感じる。

「ちょっと待って。これじゃあ小さいわね。」

桂花がハンカチを出した後、そういって猫耳フードを外してそれを力任せに引き裂く。

「桂花、それ…むぐっ！」

「いいからこれを咥えなさい、短刀を引き抜くから痛いわよ。」

いくわよと言われた後、すぐに左腕から痛みが走る。口に入れられたハンカチを強く噛んだおかげで声はあまり漏れなかった。

桂花はすぐに元猫耳フードの布で私の左腕を巻いてく。慣れているのか作業は早く、既に布を強く縛っている。

「ごめん。それ大事なものなのに。」

「いちいち気にしなくていいのよ。それにしても顔が酷いわよ。命、烏涙の顔を拭いて上げて。」

「うん、わかった。大丈夫、烏涙ちゃん？すぐ良くなるよきっと。」

命が慰めてくれながら顔を優しく拭いてくれる。

二人の優しさが、今は辛い。いつも自分が考えていることを思い出すがいっそうに追い詰められるように感じた。

烏涙が今生きている時代は現代と違い人が簡単に死ぬ。前世で平和ボケしている彼女がいかに危険なのかと話を聞いたところで理解できないのも無理はない。

さらに司馬懿に転生するということで恵まれた頭脳と身体能力を得たことで彼女は慢心した。

戦乱の世がなんだ。

そんな馬鹿げたことを本気で考えていた。

今までのツケが回って来たのだろう。鍛錬を怠らなければ撃退できたかもしれない。実際、真面目に鍛錬してないはずなのに先ほどの鉄扇の扱いに淀みは無かった。

現代において司馬懿は軍師と知られている。しかしそれとは別に司馬懿は〝武将〟でもある。この事実はあまり知られていないが。

ならば司馬懿として転生した烏涙は軍師には確実になれる頭脳を、さらに少なくとも武将になれるほどの身体能力があるのだ。

しかし実際はどうだ。ごろつき相手にこの体たらく。訓練された兵士が相手ならば逃げれるのかすら怪しい。

彼女は文字通り司馬懿の体という天才の塊を無駄使いしていたのだ。

◆

「ん？アニキー、チビー、こっちに来てくれ～。」

「どうした？デブ。」

「ガキ共見つかったのか？」

「これ・・・」

そう言ってデブは地面に向かって指をさす。

そこには赤色の道標があった。

◆

「烏涙、腕の調子はどう？」

命が心配そうに聞いてくる。

「桂花のおかげで結構楽よ。動かすと痛いけど。」

「あたり前よ、ざっくり刺さってたのよ。しばらく安静にしてなさい。」

桂花が語尾を強くして言う。

「でもすぐに移動しないと。あいつらがいつ来るか分からないのよ？」

なんとか泣き止み落ち着いたのだが、危険な状況に変わりない。

「命はどう？もう走れるかしら？」

「うん、もう大丈夫。烏涙ちゃんの怪我と比べたらどうってことないよ。」

「ふふ、そうね。じゃあ行きま…」

「やっと見つけたぞ。よくも手間取らせやがったな。」

目の前にはあの男三人組がいる。

「あ…」

思わず後ずさりしてしまう。足の震えが止まらない。

視界の奥に地面の斑点が見えた。自分の流した血だ。あれをたどって来たのだろう。

「ははは！さっきの威勢のよさはどこに行ったんだ？」

小さい奴が笑いながらこちらに来る。

「あ、あああーーー！！」

思わず反応して、大声を上げながらチビに鉄扇を振るう。

怖さ故の行動か、二人を守るための行動か自分でも分からなかった。

「ぐぇ！」

鉄扇は相手の顔面に当たりチビを昏倒させる。

「チビ！おいデブ、あいつを黙らせろ！」

「わかったんだな。悪く思わないで欲しいんだな。」

その言葉が聞こえると同時に私の身体に衝撃が走る。

桂花と命の悲痛な叫びが聞こえてくる。

私はなすすべなく、気を失ってしまった。

三、　危機と虚栄（後書き）

毎日投稿するの想像以上に難しいですね。

四、　夢と親友（前書き）

書くペースがどんどんおちていくｏｒｚ

四、　夢と親友

目が覚めた。暗さからして時間は夜だろう。

私は今寝床の上にいるらしい。

「痛っ」

起き上がろうとしたら体中からポキポキと音を上げていた。

いったいどれぐらい寝ていたのだろうか。

それよりも桂花と命は？あのあとどうなったのか？

いきなり扉が開き身構えるが、出てきたのは

「あら？烏涙、起きてたの？」

母様だった。いまここは私の部屋と気づいた。

◆

母様は今までの経緯を話してくれた。

あの後すぐに護衛が駆けつけ桂花と命は怪我も無く無事に解決したらしい。

どこに護衛が？と考えていたら毎日ばれないように私の遠くにいたと母様が答えてくれた。以前、私が護衛はいらないと強く言って

いたのでばれないように護衛をつけていたのだろう。全く気づかなかった。

ただ今回は私達が入り組んだ裏道に逃げたことによって駆けつけるのに時間がかかったらしい。

「ともかく、あなたが無事で安心しました。」

母様の顔はかなり穏やかだが目元が若干腫れている。そうとう心配させてしまったことに心を痛めてしまう。

「あの・・・母様」

「どうしたの、烏涙？」

穏やかな声で聞き返してくる。少し言いよどんでから唐突に言った。

「母様、私強くなりたいです。力が欲しいです。」

「なんで？」

笑顔のまま即効で切り返された。反応できずに口を開けっ放しにしてしまう。

「何で強くなりたいの？何で力が欲しいの？」

戸惑っているとそのまま質問された。

「それは・・・当然二度とこのような事が起きない為です。」

俯きながら答える。その姿は弱々しい。

慢心が理由であのような目にあったのだ。

自信と慢心の区別が出来ていない彼女にとってはプライドが十分ズタズタになる。

「それでは駄目よ。」

母様は私の言葉をばっさりと切り捨てる。

「なっ、何故ですか！」

思いもよらない言葉を投げられ、思わず声を荒げてしまう。

「烏涙、ただ力を欲してもその後にあるのは虚しいだけよ。」

いつものおっとりした表情とは違い、そこにあるのは真剣そのものの顔。

「夢はある？その手で成し遂げたいことはあるの？」

答えられるはずが無かった。

転生した後の暮らしは怠惰の毎日。まさに井の中の蛙。現状で満足していた烏涙に叶えたい夢や野望など懐くことなど考えられなかった。

「夢を見つけなさい、烏涙。真に叶えたいことを見つけ出したの

なら、あなたに協力は惜しまないわ。」

そんなことを言われてもどうすればいいか分からない。

「まずは自分を見つめなおす事から始めなさい。なにかきっかけを見つけれるかもよ。」

それを察したのか、優しく微笑みながらそう言いそのまま部屋から出て行った。

何をすればいいか分からない私にヒントと考える時間をくれたらしい。

◆

「夢や野望・・・天下取り？」

あのあと、ひたすら考えていた。しかし出てくる言葉はどれもピンとこない。

「そういえば、自分を見つめなおしてみろって言ってたわね。」

母様が部屋から出る前に残してくれたヒントを思い出す。

司馬懿として生きてきた自分を見つめなおすと非常に嫌悪感に懐かれる。

なぜあんなに傲慢でいられたのか不思議でたまらない。前はまったくそんなことは・・・

そうだ。転生前の自分はどうだったのか。

思い出すだけでも非常に悔しい。

今とは違い、あの頃は馬鹿みたいに努力をしていた。

転生前はあまり頭は良くなかった。でも必死に勉強すれば関係ないと、上を目指せると！

自宅では常に机と向き合っていた。娯楽にまわした時間は徹夜して取り戻した。

しかしどう足掻いても結果はせいぜい中の上。あんなに努力したのにと毎日思った。先生にちゃんと勉強した？と聞かれたときは最大の屈辱だった。

いずれ、私は自然とスポーツに力を入れていた。いろいろと試したが走り高跳びが一番うまく出来た。

変わったのは向き合う対象を机からバーに替えたくらいだ。そう、それだけだった。

運動でも相変わらず結果は出なかった。

もし今ならそんなことにならなかったと思わずにいられない。

そう考えていたら一つの考えがよぎるが、

「ただのエゴじゃない・・・」

夢なんて立派なものとは思えなかった。

ひとまず考えるのはやめて寝ることにした。

起きてからあまりベットから動いていないのにすごく疲れた気がした。

◆

「「夢？」」

桂花と命が聞き返してくる。一日安静にするよう言われていたのでベットの上でまた考えていたら二人が見舞いに来てくれた。

一人で延々と悩むのもあれなので二人に「桂花と命は夢か野望ってある？」と聞いたのだが

「どうしたのよ急に。熱でも出した？」

「ん～？熱はないみたいだよ？」

「かなり失礼ねあなた達・・・」

思わず顔を引きつってしまう。こっちは今までにないほど悩んでいて、真剣に聞いているというのに。

「ははは…えっと夢のことだったね。僕の夢は無くなっちゃったから探しているんだ。」

「どういうこと？」

つい聞き返す。命は続けて話す。

「僕が小さいときに母さんとちょっと喧嘩したときについ、『どうしてこんな身体にして産んだの！』って言ったことがあるの。ほら、僕って結構体弱いでしょ。だからいろいろ溜まっていたのを母さんにぶつけちゃったの。」

「でもその後すぐにすっごい後悔したよ。ここまで育ててくれたのは母さんでしょ、なんであんな事言ったんだろって。その日のうちに謝って仲直りしたよ。その時に将来は母さんに楽な暮らしをさせるっていう夢が出来たんだ。」

「夢は親孝行って事ね。でも夢あるじゃない。」

「実はオチがあるんだ。前にね母さんにも烏涙ちゃんと同じこと聞かれたんだ。で、それをいったら母さんがあなたが生きてくれるだけで十分に親孝行してもらっているよって。」

「いいお母さんじゃない。」

「うん、自慢の母さんだよ。だから夢は今探してるところ。桂花の夢は何？」

「えっわ、私？」

急に話が振られた桂花がすこしビックリしてる。

「私の夢は私が従えるべき主君を見つけることね。あ、でも男に忠誠を誓うのは絶対に御免だけど。」

絶対のところに力を込めて言った。以前から男が嫌いなそぶりを見せていたけど例の三人組のせいで一気に進行したみたいだ。

「なら主君候補は誰かいるの？」

「いいえ、残念ながらいないわ。とりあえず名門と言われている袁紹の所に行ってみるつもりよ。」

「二人ともちゃんと先のことを見ているのね。」

本当にそう思う。しかも自分とは違い、二人は誰かのための夢

「当たり前よ。で、聞いてきたあんたには夢か野望はあるの？」

「あるにはあるんだけど・・・二人に比べたら立派な夢とは言えない。」

「そんなこと関係ないよ。」

命がそう言ってくれるが、なぜそうなるのか理解できない。

「どうして？あなた達とは違って、自分のことしか考えないようなことなのよ。夢とは言えないわ。」

「いいや、夢だよそれは。他人の為とか、自分の為とか関係なく〝したい・なりたい〟て気持ちがあるならそれは立派な夢だよ。」

「そうよ、命の言うとおりだわ。立派とか関係なくて夢を持つことが大切なのよ。夢を持とうともしないヤツはつまらない人生しか

送れないわ。」

二人に言われて、なんとなく理解が出来た気がした。

私は単純に駄々をこねていただけみたいだ。夢は前世の自分のもの。叶えるのは司馬懿である自分。

だから夢を叶えたとしても、それは自分ではなく司馬懿の体が叶えた事になってしまうと思い込んでいた。前世の夢は前世の自分の、本当の自分の力で叶えないといけないと思っていた。

ただ認めたくなかっただけなのだ、この体を。ずっと妬んでいたいただけなのだ、この自分のものであって自分のものじゃない天才の塊である司馬懿の体を。今は私自身が司馬懿だというのに、私が私自信を嫌っていた。

自分の手の平を見る。当然、前世の体とは違い手相も大きさも違っている。

この体を受け入れないと夢を叶えるなど到底無理だろう。

不思議と、すごく晴れやかな気持ちになった。

胸のつっかえが取れた気分だ。

私はなんて器の小さな人間だったのだろう。思わず笑いがこみ上げてくる。

「烏涙ちゃんどうしたの・・・？」

「分からないわよ。いきなり笑い始めて、気持ちの悪い。」

桂花の毒舌が全く気にならない。それほどに私はハイになってた。

「桂花、命、本当にありがとう。」

「どういたしまして。」

「はぁ・・・。悩みがあるなら、次からはちゃんと言いなさい。」

こんなにすばらしい二人の親友は司馬懿へと転生しなければ出会えなかっただろう。

私は初めて、心からこの体に感謝した。

四、　夢と親友（後書き）

結構難産でした。

一日一話のペースは崩したくないです。

五、　旅立ちと母

桂花と命が帰ってしばらくした後、私は母様の部屋へと急いだ。ついドアを乱暴に開けてしまったが、母様はそれを気にしないように問いかけてきた。

「夢は見つけましたか？烏涙。」

「はい、母様。」

自信のある私の返答に母様は笑みを返し、

「なら、お茶を用意しましょう。喉が渇いては話は出来ないでしょう？」

◆

目の前に用意されたお茶を乾いた喉に流し込む。思ったより熱かったのであわててしまったが母様は熱さ気にせずに飲んでいる。

「さて、聞かせてもらいましょうか。あなたの夢を。」

「はい。私の夢は・・・」

目を閉じる。前世の体からこの体へと託すと決めた夢を思い浮かべる。

「私の夢は私より高みに居る者を倒すことです。でも、ただの強

者では物足りません。今、この国は腐りきっていて、次々と賊へと堕ちていく民が増えています。いづれ民達の不満が王宮へと爆発し、混沌とした戦乱の世になるでしょう。」

一息入れたあと、力強く訴える。

「その戦乱の世に必ず現れるはずです！覇者が、君臨者が、全てを征し、この国の頂点に立つ者が！私は頂点に立ったその者を私の力で打ち倒したい！そして国に住む者達に刻み込みたい、司馬懿仲達という名を！」

かなり熱くなってしまった。椅子から立ち上がり大声で言ってしまった。

母様はそれに対し目を開いた後、ふふふと笑った。やはりどこか可笑しかったのかと落胆してしまう。

「それは夢と言うよりもはや野心ね。まさかあのぐうたらがここまでの夢を持つなんてね。私としたことが、我が娘を見誤るなんて。」

なおも母様は笑い続けている。決して可笑しいと思われてはいないことに気づき嬉しくなる。

「では！」

「ええ、いいわよ烏涙。まずは鍛錬と行きましょう。鉄扇を準備して中庭に来なさい。いままで真面目にしていなかった分、厳しく行きますよ。」

「はい！宜しくお願いします、母様！」

◆

「あなたって本当に変わったわよね。たしか、塵芥に襲われた次の日のあたり？」

「えっと、烏涙ちゃんに夢を聞かれた次の日だと思うけど。」

桂花が言った塵芥とはあの時のごろつきだろう・・・多分。未だに男嫌いは進行していたみたいだ。

母様はあれからすごかった。それはもうスパルタというレベルではないと思う。

勉強の際には丸一日中机に向き合わされていた。椅子を立つことを許されるのは食事の時と厠ぐらいだった。前世でもここまで病的に勉強したことは無いだろう。

鍛錬も酷かった。筋肉痛は当たり前として、母様自信も女性なのに平然と私の顔面に鉄扇を振るうのだ。気絶した回数は数え切れる気がしない。

「いきなり何よ。私が変わることが可笑しいの？」

「可笑しいと言うよりね・・・想像できなかった方が正しいかしら？」

「烏涙ちゃんってとてもぐうたらさんだったからね。」

「はいはい、どうせあの時の私はドラ娘でしたよ。」

「ほらほら、拗ねないの、烏涙。」

「ごめんって、烏涙ちゃん。」

桂花は憎たらしい笑みを、命はいつも通りの笑みを浮かべて言ってくる。畜生、反論できないと分かっているくせに。

「でも本当に変わったわよ、あなた。軍師になる為に今までの遅れを取り戻してたらしいわね。それはいいわ。問題なのは武将になれるほどの強さを持ったことよ！」

ビシッと効果音がつきそうな勢いで指をさしてくる。

「まあ正直、軍師にはあまり武は必要ないからね。」

「あんたもよ、命！あんなもの振り回しておいてどの口が言えるのかしら。」

ちなみに以前、命の弩砲を持たせてもらったときがあるのだが重過ぎて持つのが精一杯だった。

それを見かねたのか、こう使うんだよーと言って私の手の上からもってそのまま撃ったのだが、まず衝撃が強い。こんなものを持ちながら何度も撃つなんて私には考えられない。

おまけに弩砲の矢が当った的は粉々だった。命は上手く当らないなーと言っていたが、あんなもの四肢のどこに当っても即戦闘不能だろう。

ちなみに命と一緒に弩砲を持った時に密着した際、命の胸が大きくなってることに気づいた。畜生。

私と桂花はこの頃成長していないと言うのに。

「まあそれはともかく、行き先はみんな渤海(ぼっかい)でいいのよね。」

そう、私たち三人は軍へ仕官するためこの街から旅立つ所なのだ。

「ええ、いいわ。」「うん、いいよ。」

私と命は答える。ちなみになぜ、渤海かと言うと、

「手始めね。袁紹が王たる器ならそのまま仕えるし、そうではないなら別の所に行くつもりよ。袁紹がそうではないときはそうね・・・公孫は微妙だし陳留の曹操の所に行こうかしら？」

「今ね、渤海に華佗って名医が居るらしいから少しは体調が良くなるように、あわよくば治してもらいたいなって。さすがにこのままじゃ仕官は難しいかな～と思うからね。」

と、上から桂花、命の理由だ。・・・公孫って誰だろう？

私は桂花が仕える相手こそ私の仕えるべき主君と言っておいた。いぶかしげな目で見られたが。

しかし私にはちゃんとした袁紹の所へ行く目的がある。

「さあ、烏涙。早く母に挨拶してきなさい。あんたが最後なのよ。

」

「わかったよ。ちゃんと待っててよね。」

「うん、行ってらっしゃーい。」

私は屋敷に急いだ。

◆

「烏涙、行くのね。」

「はい、母様。」

この町から出た後はしばらく母様には会えないだろう。自然と熱いものがこみ上げてくる。

「私はあなたに出来る限りの知識と武を教え込みました。あの日あなたの夢を聞いたときとても嬉しかった。なにも目標も無かったあなたが熱心に夢を語るのを今でも、つい昨日のように思い出せるわ。」

そう言い終ると、その手に持っていた大きな箱を渡してくる。

「これは何ですか、母様？」

箱は見た目以上の重さを持っていた。

「開けてみなさい。」

そう言われたので箱を開ける。その中身を見たとき、思わず感嘆の声を出してしまう。

そこにあるのは大きな鉄扇。私の持っている無骨な鉄扇と違い、光沢を放つその黒いフォルムは武器でありながらあふれんばかりの美しさに満ち溢れていた。

その黒色のフォルムは紛れも無く、鍛錬の時に母様が持っていた一羽のカラスの絵のある鉄扇だ。

「母様、これは・・・」

つい声が震えてしまう。

「ふふ、気に入ってくれたみたいね。ただの鉄扇じゃ心もとないでしょ。」

たしかに、コレなら武器について心配しなくていいだろう。欠点があるとすれば、あまりに美しくて武器として振るうのがもったいないと感じてしまうことぐらいか。

「それは司馬家代々、親が子へ一人前になったと判断したときに送るもの一つです。そしてもう一つは、」

「烏涙、あなたへ私の真名を教えます。私の真名は烏夢(うゆ)です。これからは烏夢とよんでください。」

目から涙が溢れ出す。母様から一人前と太鼓判を押されたのだ。こんなに嬉しいことはない。

「烏涙、行きなさい。そして必ず夢を叶えるのよ。」

「はい烏夢母様・・・必ず、私の、夢、叶えます！」

嗚咽のせいでうまく話せない。そんな私を烏夢母様は泣き止むまで抱きしめてくれた。

◆

烏涙が泣き止んでからあの子は一度も振り返らずに待っているであろう二人の友の所へいった。

その後姿は先程まで泣いていたと思えないほど堂々としていた。

今頃、あの子は街からでて遠くに居るのだろう。

「久しぶりね、司馬防。」

屋敷についてからしばらくした後、不意に声が聞こえた。

「これは・・・曹操殿、何時こちらに？」

声の正体は陳留の刺史している曹孟徳だった。その特徴的な左右にあるくるくるとした金髪は見間違えたりはしないだろう。

「先ほど来たばかりよ。久しぶりにあなたと話がしたくてね。」

「そうでしたか。おや、夏侯姉妹殿はおられないのですか？」

「春蘭と秋蘭のこと？それなら外に待機させてあるわよ。今日は

二人きりで話すつもりだから。」

「そうですか。少しお待ちください。お茶をお入れしますので。」

「あぁいいわ、入れなくて。話はすぐに終わるから。」

私と曹操殿は椅子に座りる。二人とも椅子に座るその様子だけでも気品がうかがえる。

「単刀直入に言うわ。司馬防、あなたの娘をこの私に仕えさせなさい。」

「あ、娘なら友人と共に袁紹の所へと仕官しにいくために渤海へと行きました。」

場が凍った。そんな気がしたのは気のせいではないだろう。

「え、まさか入れ違い？あなたの娘は何時ごろここから出たの？」

「つい三日前です。」

さらりと嘘をつく。そうしなければ娘たちの所へ行き、三人とも誘うだろう。それはさせれない。娘は目的があって渤海へと向かっているのだから。

「はぁ・・・惜しいことをしたわね。それもよりによって麗羽の所に行くなんて。」

「なぜですか、曹操殿？以前お会いしたときに私は娘のこと残念と申していたはずですが。」

すると曹操殿は急に笑い出す。

「ふふふ、残念？それはあなた自身がわかっていなくて？司馬防の娘とあろう者が残念なはずが無いでしょう。」

「この間まで本当に残念と思っていましたけどね。しかし一皮剥けばとんだじゃじゃ馬でしたよ。」

「あなたも昔はじゃじゃ馬だと母上から聞いたことがあるのだけど。」

「それはお忘れください。」

昔を思い出しつい、顔を赤くしてしまう。

「それに娘はあなたにも負けぬ美貌だと聞いたわ。本当、惜しいことをしたわ。」

「曹操殿の悪い癖に娘を付き合わせないでください。」

「あら、いいじゃない。あなたほどの美貌なんでしょ司馬懿とやらは。手を出すなと言われるほうが無理というものよ。」

もはやため息しか出ない。下手したら娘がそっちの方向に目覚めさせられるかもしれなかったのだ。

「そういえば、司馬防。あなたの夢を聞かせてもらったことが無いわね。」

「私の夢ですか？」

「ええ、そうよ。あなたが私の夢を知っていて、私があなたの夢を知らないのは不公平ではなくて？」

「そうですね。」

目を閉じ思い出す。あの時を。娘が私と同じ夢を持ったあの日を。

「私の夢は、娘が夢を叶えることです。」

夢が叶えられなかった私の変わりに、娘は夢は叶えられるようにと私は願った。

五、　旅立ちと母（後書き）

原作キャラ二人目登場。
どんどん字数を増やしたいです。
華琳をうまく表せているかが心配です。

六、　出会いと別れ

「ん？桂花ー烏涙ー、また黄色い布つけてる人達が武器持ってこっちに来てるよ。四人いるみたい。」

「また！またなの！もういったいコレで何度目よ！」

「三回。ちなみに今回も含めたら合計人数十一人よ。」

「来すぎよ、いくらなんでも！袁紹の所の兵はどうしてるのよ！？」

「桂花、少し落ち着きなさい。私だって吃驚してるわよ。命、とりあえず同じようにしといて。」

「うん、わかったー。」

そう返事した命は大きな弩砲を確実に賊であろう者達の居る方向に構え矢を撃つ。

当ったやつの頭がはじけた。周りの奴らがしばらく呆然とした後、残りの三人はそのまま逃げていった。

そんな光景を見たのも今ので三回目。

最初賊に襲われたとき、四人組の賊がこちらに来るのに気づいたとき当然私は鉄扇を構えた。

同じように構えた命が弩砲で賊の内の一人を撃ったのだが威力が

高すぎて頭がパーンとはじけたのだ。そいつに一番近いヤツの身体は真っ赤に染まっていた。

よく分からないのにいきなり仲間の頭がはじけ、その肉やら目やらが自分に向かって飛んでくるのだ。賊の残りは恐怖のあまり叫び声を上げながら逃げていった。

そんなスプラッタな光景を見せられた私と桂花は顔を命よりも青くしたが、命は一仕事を終えたような顔だった。

それからしばらくした後、別の三人組の賊が来たのだが先ほどと同じように三人組の内の一人の頭がはじけ、それを見た生き残りが逃げていく。

何の為に地獄のような鍛錬したんだろうと思った私を誰が攻められようか。

ちなみに賊は全員黄色い布を体のどこかに巻きつけていた。

大方黄巾党だろう。それはすなわち、三国の世が近づいていたという事だ。

◆

「やっと着いたわね・・・。」

「ええ、本当に・・・。」

「大丈夫？二人とも。」

私たちは何とか渤海に着いたのだが実はあの後、また賊がやってきたのだ。

まあ、命が一人の頭をパーンして終わったが一日で四回も襲われたのだ。精神的に疲れても無理は無い。

「直ぐに宿を取った後、昼食をとりましょう。」

「「賛成・・・。」」

桂花の案に私と命は当然同意した。

◆

「へー、結構賑わっているね。」

「外は賊だらけだけどね。」

「いい加減忘れなさいよ、あんなこと。」

宿を取った後、三人で昼食をとりに行こうと店を探している。

やはり名門というわけか、命の言うとおり街は賑わっていたが、

「だれもかれも〝天の御使い〟の話ね。」

「ん？桂花ちゃん知ってるの？」

「ああ、それ私も気になっていたの。」

街の人達は皆、天の御使いという者の話をしている。

前世の知識にはそんな単語に覚えが無い為、大したことではなさそうだが。

「二人とも知らないの？天の御使いていうのはエセ占い師として名高い管輅（かんろ）が予言した内容のことよ。ざっくり説明すれば、『天から使いが現れ、国が平和になります』ってこと。」

うわぁ・・・エセってレベルじゃなさそう。

「なにそのトンデモ予言。」

「でもエセってわかってるのに何でみんな話題に出すんだろう？」

「それほどこの国が疲弊してるのだよ。」

「えっ？」

後ろから急に声がかかる。振り向くとそこにいたのはスーツのような服をまとった背の高い女性だった。服については時代がどうとか、もはや言うまい。

「アンタ誰？急に話しかけて。」

桂花が少々鬱陶しそうに言う。

「すまない、私の名は張（ちょうこう）？、字は儁乂（しゅんがい）というものだ。そなたらは？」

っ！この女性が張？なのか。まさか目的の人物にこうも簡単に見つけれるとは。

思わず笑みを浮かべそうになるのを我慢する。第一印象は大切だ。

「私の名は司馬懿、字は仲達よ。で、二人が・・・」

「荀？、字は文若よ。」

「僕の名は郭淮で、字が伯済だよ。」

「で、アンタはなぜ私たちに話しかけたの？」

「ふむ、実はな天の御使い以外にもこの町で話題になっていることがあってだな。」

「で、なにが言いたいの？」

回りくどく言ってくる。正直めんどくさい。

「その内容が、『三人組の旅をしている少女には近づくな。さもなくば頭が破裂するぞ。』と言うことなのだが。」

「あぁ、あれね・・・」

桂花が心なしかげっそりしたように答える。あの光景を思い出したのだろう。

「やはりそなたらのことであったか。ぜひ、話をしたいのだが・・・」

「話をするなら食事しながらにしましょ。私たち昼食がまだなの。」

「それは悪いことをしたな。ならあそこはどうだ？」

そう言って張？が指をさしたのは少し大きな店だった。

「いいわ、じゃあそこで昼食をとりましょ。桂花も命もかまわないわね？」

「かまわないわ。」「べつにいいよ。」

「なら行こう。あの店は八宝菜が旨くてな。」

◆

「なんと！その弩砲とやらで賊の頭を破裂させたのか。」

「そうだよ。すごいでしょ？」

「ああ。まさか矢でそのような威力が出せるとは。」

現在私たちは店で八宝菜を食べながら張？と話をしている。

「でもあなたの持つ爪・・・かしら？それもすごそうだけど。」

張？の持つ武器は巨大な爪が特徴的な腕鎧だった。それは鍵爪などとは違い、爪一つ一つが動かせるようになっているようだ。

「そうだろう。こいつは自慢の武器であり、相棒でもあるからな。司馬懿殿も武器も扱うのだろう？」

さすがは歴史に名を残す武将。一目で武器を扱うと見抜いてきた。

「ええそうよ。私が扱うのは鉄扇なのだけど・・・これよ。」

「ほう。なかなかすばらしい。武器として扱うのがもったいほどの美しさだな。」

「実は私ももったいないとか思ってるのよ。」

私たちはつい、お互いの武器の話で盛り上がっていた。

「はぁ・・・。私にはついていけないわ。」

武器を持たぬ桂花は話に入れないでいた。

「すまん、つい話し込んでしまった。」

張？は苦笑いしながら言う。

「そなたら、恐らく袁紹の所へ仕官するつもりだろう？」

「ええそうよ。それが？」

「いや実は私も武将として仕官しようとしてな、そこで例の噂を聞きそなたらもそうではないかと思い話を聞いたのだ。どうだ？これも何かの縁。共に行かないか？実は一人では寂しくてな。」

そういってははは笑う。その様子をみると寂しいということは冗談みたいだ。

「あっ、僕は違いますよ。」

「む。どういうことだ？その武器を扱えるなら武将には簡単になれるだろうに」

「実は僕、体が弱いんだ。病弱らしくて調子が悪いときはずっと寝床の上に居るのも珍しくないんだ。」

「なんと、それはいたわしい事に。旅も楽ではなかっただろう。」

「うん。途中で烏涙ちゃんに背負ってもらう時もあったよ。この体じゃ仕官なんて無理だからね、華佗って医師ならなんとかなるかなって。」

「華佗か。大陸一の医師ならなんとかなるかもしれんが生憎、その華佗ならすでに旅立ったらしいぞ。」

「え！そんなぁ～。」

命ががっくりとうなだれる。無理も無いだろう、苦労して来たのに結果がもう居ませんなのだから。

「せめてどこに行ったのか分からないの？」

さすがに不憫に思ったのか桂花は張？に問うが、

「さぁ。聞いたものによれば『それはこの俺を必要としている人

達の所だ！』と言っていたらしい。」

セリフ自体はかっこいいがここにその必要としている人がいるのに、と微妙な気持ちになる。

「そうだ、陳留へと向かってみたらどうだ？そこの刺史が華佗をさがしていると聞いたことがある。運がいいと会えるかも知れんぞ？」

「でも一人じゃ・・・」

「陳留に行く商人を探してみたら？護衛として雇ってもらえばいいと思うわよ。一応、どんな時でも弩砲は撃てるのでしょ。一発撃つだけで大丈夫でしょ。」

「いいわね、それ。なら三人で交渉しにいきましょう。命を賊の頭を破裂させた張本人と言えば喜んで雇ってくれるはずよ。あ、念のため女の商人を探さないといけないわね。」

なにやら張？が疑問を浮かべた表情をしている。

「どうしたの？」

「女ではないといけない理由があるのか？」

「はは、あまりお気になさらず。」

張？は首を傾げた。

◆

「うぅ・・・桂花ちゃん、烏涙ちゃん、また会おうね。」

「はいはい。ほら、これで鼻をかみなさい。」

私が渡したハンカチで命がちーんと音を立てる。

店を出た後、張?にも手伝ってもらい陳留へと行く商人を探した。

なかなか見つからなかったが・・・。いや直ぐに見つかりはしたのだが、みんな男だったので桂花が『女じゃないとだめ!』と言って譲らなかった。そのせいで見つけるのになかなか苦労した。

「いい。体調にはしっかりと気をつけなさい。それと男にも。何時、何処で襲われるか分からないからね。」

「うん。桂花ちゃんも気をつけて。」

「荀?殿は何か男に対して恨みを持っているのか?」

「まぁそんなとこ。」

「郭淮ちゃん、もう出発するわよ。」

ふくよかな女性が来た。命を雇ってくれる女商人だ。

「はい、わかりました。張?さん、短い間でしたがありがとうございました。」

「いや、こちらこそ。あの弩砲という武器なかなかにすばらしい

ものだった。機会があればまた見せてくれ。」

「では命のことを宜しくお願いします。」

「ははっ、よろしくされるのはあたしの方だけどね。まかせときな。」

なかなか頼りがいのある女性だ。これなら命も安心だろう。

馬車が出てしばらくした後、命がこっちを向いて手を振ってくる。

私たちも、馬車が見えなくなるまでずっと手を振っていた。

六、　出会いと別れ（後書き）

しばらく命はおやすみです。

七、　勧誘と勝負

「簡単だったわね。」

「簡単だったな。」

「簡単ね、本当に。」

命を見送った次の日、張?と共に私と桂花は文官、張?は武官を希望し試験をうけたのだが、

「烏涙、アンタは何て答えた?」

「何てって聞かれても普通、としか言えないわ。張?はどうだったの?」

「こちらは試験官と組み手だったがな。正直、拍子抜けだったぞ。」

そして三人同時に試験終了後、しばらくして試験官に渡された紙を見てみる。

そこには、『あなたは非常に優秀だと判断されました。南皮(なんぴ)へと行き、さらに試験を受けてください。』と書かれていた。

「南皮って袁紹の本拠地よね。こんなんで本当にいいの?」

「いいんじゃない?私には基準なんてわからないわ。」

「まあともかく準備をして南皮へと向かおう。早いほうがいいだろう。」

「次は何回族に襲われるのでしょうね・・・。」

「流石にもうないでしょ。」

そう言いつつも、次は賊がやってこないようにと心底願った。

◆

「そしたらこの有様よ・・・。」

「司馬懿殿っ！そちらに一人いったぞ！」

街から出て約三時間後、八人の賊に襲われていた。さすがに嫌になる。

今回は命がいないので前衛が張?、後衛を私という具合に賊と戦っている。桂花は戦えないため、私の後ろに隠れてもらっている。

「もらったぁ！」

「もらってないわよ。」

男が振り下ろしてきた剣を後ろの桂花に当らぬよう、鉄扇で受け流しそのまま側頭部へ振りかざす。

ぐぇと間抜けな声を上げて男が崩れる。この程度のレベルなら何人いても負けはしないだろう。

「シッ！」

張？が気づいたら残り三人となっていた賊達に止めを刺しにかかった。

その巨大な両手の爪で鮮やかに男どもを切り裂き、最後の一人を刺し殺す。最後の一撃はなんとなく赤色のズゴ〇クを思い出した。

張？は腕を振り爪についた血を払う。

「ふん。他愛なし。」

「お見事でした張？殿。美しくも激しい武でしたよ。」

実際に張？の武はすごかった。敵の攻撃を最小限の動きで避ける体の捌き方、そして確実に相手を死に至らしめる爪の一撃。劉備が恐れていたというのも分かる。

「司馬懿殿もなかなかだったぞ。あの敵の一撃を受け流したのを見たときは戦いの途中でありながら、不覚にも見ほれてしまった。」

「張？殿ほどの方にそういっていただけるなんて、恐縮ね。」

「褒め合うのもいいでしょうけど早く行かない？男共の血の臭いがうつるの嫌なんだけど。」

男というだけで桂花にボロクソ言われる賊が少し哀れに見えた。

「それにしてもまた黄色い布を巻きつけているわね。また黄巾党

？」

「みたいだな。しかし現れる賊が皆黄色い布を身に着けているとは・・・正直気味が悪い。」

「一組見つけたら三十組はいるんじゃない？」

「そんな油虫みたいな集団私は嫌よ。」

「私だって嫌よ。そんな奴ら相手するの。」

張？が若干顔を青くして「油虫・・・」とつぶやいてる。虫が嫌いなのかしら？

「あら、張？。顔が青いわね、ここに油虫なんていないわよ。」

そのことに気づいたのだろう。桂花が張？をからかい始めた。

ちなみに桂花が油虫を見つけた場合、叫び声を上げて私に助けを求めてくる。リアクションをとらないだけで見るのも嫌なのだが何度も桂花に処理をさせられたせいである程度耐性ができた。

「む！そんなはずが無かろう。この私が油虫如きに恐れをなすなど・・・」

「あっ、足元に居るわよ。」

「ーーーーっ！！」

私が指摘すると張？は驚いた猫のように飛び跳ねた。ちなみに油

虫は本当にいた。

「ちょ、ちょっと烏涙！早く何とかしなさいよ！」

先ほどの張？をからかっていた時と一変して顔を青くし私にしがみついてくる。

「荀？殿も恐れをなしているではないか！」

「いいから静かにして、二人とも。何とかするから。」

「はっ早くしなさい！」「気をつけろよ・・・。」

桂花はまくし立てるように、張？はまるで私が死地へ赴くのを見るように言って来た。

鉄扇を使うのは流石に嫌だったので、そこら辺にあった大き目の石で油虫を潰さないようにたたき殺す。

それをしている私を、桂花と張？は尊敬のまなざしで見ていた。

◆

それ以降賊も現れず、無事に南皮に着いた。やはり前回の襲撃の多さは異常だったみたいだ。そうでなければ非常に困る。

「これが袁紹の城ね・・・さすが名門ってとこね。」

「でも名門だから王たる器は持っているとは限らないわ。」

「荀?殿の言うとおりだな。さて、行こう。あまり長く此処にいては通行人の邪魔になる。」

「そうね・・・。所でコレ、誰に渡せばいいのかしら。」

桂花の言うコレとはあの時、試験官にもらった紙のことだ。コレをもって南皮へと行ってくれと言われただけなのだか、説明が無さ過ぎて不便だ。

「あの兵士でいいじゃない?すみません、コレの事なんですが・・・」

「ああそれか。おい、顔良様を呼んでくれ。例の人物がきた。」

兵士がそう言うと別の兵士が頷き、城の方へ歩いていった。

「しばし待て、しばらくしたら顔良様が・・・」

「仕官希望の方たちですかー!」

早い。兵が城に向かったのは先ほどだったはずなのに。

猛スピードでこちらに来たのはボブカットの女性だった。走っているせいで揺れている胸を桂花が妬ましそうな表情で見ている。

「はじめまして、わたしは顔良と言います。荀?さんと、司馬懿さんと、張?さんですね。早速ですけどわたしについて来て下さい。」

少し早口で言った後、顔良は城へと歩いていった。私たちもそれ

に続く。

「なにか妙に嬉しそうね、あの顔良って人。」

「さあ？大方、人材は量は十分でも質の方が不十分とかじゃない。」

図星だったのだろう。私の疑問に返した桂花の言葉で顔良がビクッとした。

しばらくしたら大きめの部屋に入り、なぜか顔良がキョロキョロし始めた。

「あれっ文ちゃんは？すみません、みなさん少しお待ちください。」

そう言って顔良は部屋から出て行った。「文ちゃんー！どこに居るのー！」とドップラー気味に聞こえる。

「なあ、二人とも。私は不安に思ってきたのだが。」

張？の言葉に私と桂花は返せなかった。

また外から声が聞こえてきた。片方が顔良の声、片方が知らない声。顔良が文ちゃんとやらをつれて来たんだろう。

「も～文ちゃん、部屋で待っててって言ったじゃない！」

「いやぁだってよー、腹がすいて仕方なかったんだよ。」

「だからって待たせちゃ駄目じゃない。」

顔良がつれて来たのは水色のぼさぼさとした髪の女性だ。その見た目や先ほどの発言からお気楽さが感じ取れる。

「お待たせしてすみません。では文官希望の方は荀?さんと司馬懿さんですね。二人はわたしに、」

「えーと、張?は武官希望だからあたいについて来てくれ。」

「そうか。二人とも、がんばれよ。」

「アンタに言われなくても大丈夫よ。」

「ええ。張?殿は余裕でしょうけど。」

「お?言ったなー。気をつけろよ、あたいの試験は厳しいぜぇ。」

「ふふ、上等だ。」

「あっ、張?。これが終わったら二人で話したい事があるのだけどいいかしら?」

「別にかまわんが。」

「なら決まりね。じゃあね。」

そういってわたし達は別れた。

「ねえ烏涙、話って何なの?」

「話？張？じゃないと話せない内容。」

大方武器の事と考えたのだろう。呆れた顔をされた。

◆

「来てくれたわね。結果は・・・聞くまでも無いわね。」

「ああ。司馬懿殿も問題は無かったのだろう？」

「ふふふ、愚問よ。」

試験は無事に終わった。三人とも文句無しだったそうだ。

現在は夜遅く。誰にも聞かれたくない内容なので自然とこの時間となる。

「で、本題は？」

笑顔から一転、真面目な表情でこちらを見る。

「張？、あなた私に仕えなさい。」

「ほぉう？詳しく聞こうではないか。」

一応、話は聞いてくれるようだ。こちらとしても都合がいい。

「あなたは武将希望なんでしょ。あなたが欲しいモノは何かしら？」

「戦にて勝利を手にする事。数多の者と死合い、打ち倒す事。相手が格上だとさらに良い。」

「それをあなたに与えようと言うのよ、この私が。」

堪え切れなくなったのか、張？は笑い始めた。

「くはははは！。貴様が！どう与えようと言うのだ！私の最も欲しい名誉を！」

「簡単よ、この大陸で最強の国と戦えばいいのよ。？今の〝では無いわ。あなたの目からしてもこの国が疲弊しきっていると分かっているわね？」

「ああ。そしていずれ、戦乱の世が訪れると言いたいのだろう。」

「ええ、その通りよ。」

「ふん、天下取りがしたければ国を作ればいいだろう。」

「簡単に言うわね、あなた・・・。それでは駄目よ。言ったでしょ、〝最強の国〟と戦うと。」

張？の眉間に皺が寄る。私の言いたい事が理解できたのだろう。

「貴様、裏切れと言いたいのだな。仕えた国が大陸を統一したときに。」

「さすが張？ね、その通りよ。それなら数々の武将と戦える。そ

して頂点へと上った国を自らの手で落とす、つまり最強を打ち倒すと言うこと。想像しただけでも震えるわね。」

「なるほど。貴様の目的も私に似たようなものか。で、まずは袁紹様の軍に大陸統一させようというわけだ。」

「何言ってるの？袁紹如きにそんな大層な事できるはず無いじゃない。」

張？は意表をつかれた顔をした。声を荒げて私に詰め寄る。

「ふざけるな！ならなぜ仕官したのだ！」

「あなたに会うためよ。」

張？の顔は理解できないと言いたげな表情だ。

「名を知られるような事はまだ、何一つしていないぞ。どこで私の名を知った？」

「さぁ～。どこかしら？」

「ふざけるな！」

前世の記憶といっても信じてはくれないだろう。そもそも言うつもりはない。

「張？、あなたは本当にすばらしい武を持っているわ。並大抵の者では絶対にたどり着けない領域にあなたはいる。でもだめよ。あなたが良くても、それを使う者が無能では話にならないわ。」

「その時こそ、私の武が示される時ではないのか！私の武で主君を立てる事が・・・」

「馬鹿ねっ！本当にそう思っているの？優秀な主君が優秀な臣下へ的確な指示を与え、的確にそれをこなす。それが完璧な関係なのよ！袁紹ではあなたを使いこなせない、だから私があなたを使うと言っているのよ。」

「ならその定義を私が覆して見せよう。」

そう言って張？は私に背を向け帰ろうとする。それは許さない。

「そう、私に従わないのね。なら力ずくで従わせるしかないわね。」

「ほう、そうくるか。ならば来い。叩きのめしてやろう。」

その言葉に私は苦笑で返す。張？の視線が一層鋭くなる。

「何言っているの。私は文官で、軍師希望よ。なら用いるのは策略に決まっているじゃない。」

「ならどうするのだ。戦の途中で私を謀るのか？」

「そんなもったいない事するわけ無いじゃない。そうね・・・管輅みたいに予言しようかしら。」

「予言だと・・・。」

「えぇ、予言よ。あなたは袁紹を見限り、軍を抜けるわ。そして自らの意思で私の下へ来る。」

「ふん、ありえんな。前者も後者も選択するはずが無い。」

張？はまっすぐとした視線をこちらに向ける。それからは意志の固さが感じ取れる。

「これは勝負よ。私の予言どおり、あなたが私の下へ来たら私の勝ち。そうならなかったら私の負け。私が勝った場合、私に従ってもらうわ。」

「受けて立とう。だが戦場で合間見えたとき、その首貰い受ける。」

張？から殺気がほとばしる。皮膚がピリピリとし冷や汗が出そうになる。ここで汗を見せてはだめだ。私はおまえと対等だぞ、と伝えなければならない。

「それは恐いわね。烏涙よ。」

「む？」

「私の真名よ。将来の部下には真名を授けるべきと思うのだけれど。」

張？はまさに鳩が豆鉄砲を食らったような顔をした後、急に笑いはじめた。

「ははははっ！なら、引導を渡すものに真名を送らなければなら

ないな。」

「覚えておけ。私の真名は奏(かなで)。貴様を黄泉への引導を渡す者だ。」

互いに浮かべるのは満面の笑み。相手に安心感をあたえるような優しい笑みではなく、隙あらば相手の首筋を噛み千切らんとす獰猛な笑み。

自然と声は重なった。

「「私が勝つ！」」

七、　勧誘と勝負（後書き）

キャラが崩れてないかが心配です
次回からサクッと原作突入です。

八、　対面と罰

「荀?さん、本当に出て行くんですかぁ?」

「当たり前よ。烏涙、準備は?」

「もう出来てるわ。」

「司馬懿さん、思いとどまる事は・・・」

「すまないわね、顔良。桂花の主君が私の主君だから。」

「うぅ・・・せっかく仕事が減ったのにまた元通りだよ。」

現在、桂花と私は荷物をまとめている。南皮から出る予定だ。

「文句ならあなたの主に言いなさい。」

「そんなことしたらおしおきされちゃうよぉ。」

そもそものきっかけは桂花の一言だった。

数日前にいきなり桂花が私の部屋に入って来て

『袁紹は王の器じゃなかったわ。烏涙荷物をまとめなさい。陳留に行くわよ。』

と捲くし立ててきた。

目的は終わったのでそろそろ魏へ行きたかったし袁紹の高笑いはもう聞きたくなかったので全面的に同意したのだが、さすがにすぐ文官を辞める事はできず今に至る。

「烏涙、桂花、見送りに来たぞ。」

「あら奏。悪いわね、忙しいのに。」

「気にするな。」

桂花と奏が真名で呼び合う。私が奏に真名を教えたのを知った桂花は、なら自分もと真名を教えた。

それほど桂花が自分を信頼してくれていると分かると非常にうれしくなる。

まぁ実際、私と奏は普通の真名の渡しあいではなかったのだが。

「ではな。〝また〟合おう。」

「ええ。〝また〟会いましょう。」

桂花と顔良は私と奏の発する不穏な空気に気づいたのか、怪訝そうな表情を浮かべる。

最後まで空気は変わらずに私たちは別れた。

◆

さて、いきなりだが長年普通と思っていた友人の意外すぎる一面

を見たとき、皆はどのようなリアクションをとる？

ちなみに私の場合は現実逃避を取るようだ。

「あぁ～～曹操さまぁ～～。」

頬を染め、くねくねとしながら言うのは桂花。誰こいつ。

（命さん、事件です。あなたの幼馴染の一人は百合のようです。）

この陳留にいるであろう幼馴染を思い浮かべる。あの子のことだから戸惑いながらも桂花を応援するのだろう。それはそれでシュールだ。

王佐の才を持つものは全員こうなのかしら？そんな馬鹿な事を考えていた。

桂花がこうなったのはあの時からだ。

私たちが陳留へ着いたとき刺史、曹操が賊の討伐の為の人材募集を始めたのだがその際わずかな時間だったが顔を見せたのだ。

その時の桂花の表情は忘れもしない。頬を赤く染め、目をとろんとさせた恍惚とした表情。

誰だってわかるだろう。それは明らかに恋をしている顔だった。

しかも一目惚れとは・・・実際にあるものかと思ってしまった。

私も一目惚れではないが曹操という人物から目が離せなかった。

圧倒的存在感。たとえ目に入るのが一瞬でも、その姿は目に焼き付けてしまうだろう。

この人が私の主君になる人。そして私が打ち倒すもの。

自然と笑みを浮かべる。そしたら一瞬目が合った。

ドキリとしたが、たった一瞬だ。気にするほどでもないだろう。

曹操の姿が消えるまで私の視線は釘付けされていた。

曹操の姿が消えても尚、桂花の表情は変わりはしなかった。気がつかせるのに五分ほどかかった。

そして宿を取り今に至る。

「桂花、落ち着いたら。」

私は呆れながら言う。しかし桂花は、

「これが落ち着いてられますか！ああ、早く曹操さまの軍師になりたいお傍に居たい・・・！」

はぁ・・・。思わずため息を吐いてしまう。これで何度目だろう。

「で、どのような方法を採るの？普通に成り上がるのは待てないんでしょ。」

「当然よ！既に策は用意してあるわ。まずは今ある人材募集で糧

食の監督官になって・・・」

桂花の話が始まる。内容は糧食の監督官になりわざと量を少なくするといったものだ。

そうすれば不審に思った曹操に直々に呼ばれるはずだからその時に自分を売り込む、と言ったところだ。

正直危険だが、この時代だからこその考えだろう。

「そう。じゃあがんばってね。」

「なに言ってるのよ、アンタも付き合うのよ。」

「あー気持ちは嬉しいけど、それを考えたのは桂花でしょ？それに副監督官は何人か成れるけど、監督官に成れるのは一人だけでしょ。」

「烏涙・・・。」

「私は気にせずに行けばいいわ。そして曹操様に気に入られたら私を紹介して頂戴。」

「ありがと烏涙ー！」

そう言って桂花が勢いよく飛び込んできた。ここまで桂花に感謝されたのは初めてだろう。

◆

（どうしよう・・・烏涙に顔向けできないわ・・・。）

桂花は今、非常に困っている。結果からして策は上手くあいった。上手くいったのだがその後が問題だ。

天から来た全身白濁色の発情猿に真名を呼ばれる事になった事は非常に気に食わない事だが、それ以上に曹操さまに真名を呼ばれるようになったときは天にも上る気持ちだった。

だが賊討伐へ向かった時に全ての原因が現れた。季衣と言う名の少女だ。

彼女は進軍中賊達と戦闘しているのを見つけ、少々いざこざがあったようだが軍に協力してくれる事になった。

彼女の働きは優秀で予定よりも早く討伐は終了した。此処までは良い。

問題は季衣の食べる量だ。大人何十人分と言う話では済まされない。少々残るはずの糧食がどんどん減っていくのを見たときは顔を青ざめ、全て無くなってしまった時は絶望した。

思い出すのは曹操さまの言葉。

『もし糧食が不足したらならその失態、身をもって償ってもらうわよ？』

このままではいけない。何かしなければ私の首はあの鎌によって刎ねられるだろう。

しかしなにもできない。もうお終いだ。駄目だと思ったとき、

「華琳さま。糧食の補給部隊が来たようです。」

「補給部隊・・・？そんなの頼んでいないはずよね・・・。責任者は？」

「司馬懿。そう名乗っていました。」

聞くはずも無い者の名前を聞いた。

◆

俺が天の御使いとして華琳に拾われ、初めて賊の討伐に連れて行かれた。

不覚にも途中で意識を失い、覚めたときには既に終わっていたみたいだ。

意識を失ったのは確かに悪いが縄で縛られ、荷物のように馬の上に置かれるのは酷いと思う。

そう思いつつ華琳達と話をしていたら急に不穏な空気になった。

糧食が足りないらしい。その事について華琳が桂花に問い詰めている。

どうやら俺が意識を失っている間に食料が尽きてしまったらしい。

桂花は顔を青くし、プルプルと震えている。思い出すのは華琳と

桂花の約束。

糧食が不足したら命をもって償わせるといった内容だ。いくら悪口を言われたとしても、目の前で知り合った人が死ぬのは見たくない。

しかし俺の意見は華琳によってばっさりと切られる。

どうしようかと考えていたら秋蘭に伝令が来た。

どうやら補給部隊が来たらしいが、その責任者の名前を聞いたとき驚きのあまり大声を出してしまった。

「司馬懿！司馬懿ってあの！？」

急に大声を上げた自分に皆が驚く。

「どうしたの～兄ちゃん？その司馬懿って人知ってるの？」

知って居るも何も三国志でも有名な軍師の名前だ。しかし疑問点はそこではない。

司馬懿はこんなに早く魏に入っているはずは無いのに。

「一刀、大体想像はつくけど静かにしてくれないかしら。今からその司馬懿を呼ぶから。」

「あ、あぁ。」

先ほどから桂花の視線が強い。なぜだろう？

しばらくしたら兵に連れてこられ一人の少女が来た。

その少女の見た目は中国人でありながら日本人ぽかった。

長い黒髪に控えめな体、そして中国人の特徴である鋭い目ではなかった。

この子があの司馬懿か・・・。当然女の子になっているみたいだ。しかしあの容姿を見ると日本を思い出しノスダルチックな気持ちになる。

そうこう考えていたら華琳と司馬懿が話始めた。

◆

あの男・・・いったい誰？なぜ私の名前を知っているのかしら？それにこの時代にはポリエステルとかもあるのかしら？

私が兵に連れられ向かった先には曹操と桂花、そして謎の男を含めた六人が居た。

「あなたがこの補給部隊の責任者ね。」

「そうでございます、曹操様。」

曹操からプレッシャーを感じる。自分がつぶれてしまうと錯覚してしまうほどだ。

「では、ただの副監督官にすぎないあなたが独断で部隊を率いた

理由。教えてもらおうかしら。」

「御意。それは糧食が足りなくなると情報が入ったのでこうして部隊を率い、参上いたしました。」

「それで？その理由であなたの罪は軽くなると思ってるの？」

「ちょっと待てよ。足りなかった食料が補給によってなんとかなるんだからそれでいいだろ。」

「だまりなさい、一刀。私はこの者と話をしているの。」

「うっ・・・。すまん悪かった。」

「馬鹿だな北郷は。食料を独断に扱うなど許されるはずが無かろう。」

黒髪の女の言葉に男はぐぅの音も出ない。それも当然、この時代において食料は非常に大切なもの。勝手に扱う事はまず、許されない。

それを気にせず曹操は話を続ける。

「で、他に言う事があるの？」

「ございます。曹操様、新しく入られた軍師と約束をされたようですね。糧食が足りぬならば、命をもって償わせると。」

この情報を兵士が噂している時は心臓が飛び出るかと思った。いくらなんでも、ここで桂花を死なせるわけにはいかない。

「ええ、その通りよ。あなたはなにが言いたいの。」

「曹操様、桂花を罰する事はおやめください。私が率いてきた補給部隊によって糧食は十分の筈です。桂花は類まれな頭脳を持ち、さらには王佐の才もございます。此処で失うには惜しい人材かと。」

「たしかに、あなたの言う通りね。なら望みどおり桂花への罰は無しとする。では、罰を受ける覚悟はあるわね？」

「既に出来ております。」

「まっ、待ってください曹操さま！」

急に桂花が声を出す。

「どうしたの、桂花？あなたの罰は無くなったわよ。」

「その補給部隊は私の指示で出しました！ならば、罰せられるのは烏滸では無く私です！」

「桂花っ！」

駄目だ。せっかく桂花の罪を無くしたというのにこれでは後戻りだ。

「そう。おかしいわね、この司馬懿の言と桂花の言は矛盾するわよ？」

「そう言う様に私が指示を出しました。」

「そう。桂花、あなたまさかこの私に対して嘘を吐いているわけではないよね。」

「！・・・っ。はい、そのような事があろうはずがございません。」

「わかったわ。ならば桂花、あなたに罰を下すわ。」

「はい、曹操さま・・・。」

もうだめだ。桂花は魏にとって天下統一に欠かせない軍師なのに。

皆が見守る中、曹操は結論を下す。

「桂花は死刑・・・だけど此度の遠征の功績を無視はできない。減刑しておしおきで済ませましょう。」

良かった・・・。おもわず脱力してしまう。

「そして私を華琳と呼ぶ事を許しましょう。季衣、あなたもよ。これからの働きを楽しみにさせてもらうわ。」

「「はいっ華琳さま！」」

「ふふっ。あなた、司馬懿といったわね。城に戻ったら話しがあるわ。」

「・・・御意。」

どうやら桂花の危機は去ったが私のはまだ一難ありそうだ。

八、　対面と罰（後書き）

原作に沿わせながらもオリジナルを入れる事が意外と難しいです。

九、　仕官と御使い

「では、改めて名前を聞かせてもらおうかしら。」

曹操の尋問が終わり陳留の城に帰還し、そのまま広間へと連れられた。

「御意。名は司馬懿、字は仲達と申します。」

「なら司馬懿、直々に私へと仕えなさい。」

思いもよらぬ言葉を投げかけられた。しかし、

「なっ、華琳さま！何故です！このような馬の骨も分からぬような者に・・・」

黒髪の女・・・夏侯惇が解せぬと口を挟む。

「姉者。」

水色の髪の女・・・こちらは夏侯淵だ、が夏侯惇に話しかける。

「なんだっ秋蘭！」

「忘れたのか。司馬防殿に会いに行った時の事を。」

「覚えているとも。華琳さまと秋蘭と私の三人で司馬防・・・司馬？」

う～んと夏侯惇がしばらく悩む素振りをする。というかこの人たち私の母に会いに来ていたのか。

夏侯惇は思い至ったのか顔を上げ目を見開き、

「そうか、分かったぞ！つまりこの司馬懿とやらは、あの時華琳さま自らが司馬防殿の娘を引き抜こうとしたにも関わらず、既に袁紹の下に行っていた不届き者の事だな！」

「そうだ。よく出来たな、姉者。」

「ふふん。」

夏侯惇が得意げにしているのを、夏侯淵が微笑みながら見ている。それにしても不届き者は無いんじゃない？

「あっ、華琳さまー。そういえば桂花と司馬懿さんって知り合いですか？真名で呼び合っていましたけど。」

「そういえば気になるわね。桂花、話なさい。」

「はい、華琳さま。」

桂花はこれまでの経緯をかいつまんで話す。

「そうだったの。まあ、麗羽の所を抜けたのは正しい判断ね。」

先ほどから男、北郷一刀というらしい、が考え事をしている。

前世の記憶に無い名前、まるで日本人のような名前。そして私の

名前を知っている。

私の脳内で一つの仮説が生まれる。

（桂花と司馬懿が幼馴染。どういうことだ？俺の知っている歴史と全然違うじゃないか。）

「兄ちゃん～、難しい顔してどうしたの？」

「あ、ああ。なんでもないよ。心配してくれてありがとうな、季衣。」

（この北郷が本当に現代の人間としたら何について考えている？私達が女性だということか？いや、それは無さそうだ。こいつは曹操達と普通に接していた。なら桂花と幼馴染の事か、魏に入るタイミングか。ともかく曹操の性格からして妖術使いはありえないわね。）

「さて、やっと本題に戻れるわね。司馬懿、あなたは私の軍師になるつもりはあるのかしら？」

恐らく私をスカウトした理由は烏夢母様の、司馬防の娘だからだろう。返事はもちろん決まっている。

「私の真名は烏涙です。桂花の主君こそ我が主君でもあります。」

「ふふふ、分かったわ。烏涙、あなたは私の真名を呼ぶ事を許す。司馬防の娘に恥じぬ働きを見せなさい。」

「御意、華琳様。」

「あなた達も烏涙に真名を授けなさい。」

「はっ。私の真名は春蘭だ。いいか、私はまだお前のことを認めてないからな！」

「秋蘭だ。姉者の事はいつもの事だから気にするな。」

「ボクの真名は季衣だよ。よろしくね烏涙。」

「俺の名前は北郷一刀、天の御使いていうのをやっている。。真名は無いから好きに呼んでくれ。」

天の御使い！？　あれはエセじゃあ・・・

「天の御使い・・・どういう事？」

「ああ、烏涙は知らなかったわね。この汚らわしい男があの占いの天の御使いって存在らしいの。時々私達の知らない言葉を使っているわ。いい、近づいては駄目よ。妊娠されるわよ。」

「さすがに酷いだろ、それ・・・。」

桂花の毒舌に北郷が落ち込む。それよりも・・・

「知らない言葉って？」

「ああ。たしか初めて会った時、〝ちゅうごく〟や〝にほん〟などと言っていたな。」

私の疑問に秋蘭が答えてくれる。

っ・・・！　やはりこの北郷という男、転生をせずこの世界に迷い込んだらしい。

ボロを出さぬように用心しなければ・・・。

「なるほど、たしかに聞いた事のない言葉ね。」

心を顔に出さないよう気をつけ嘘をつく。

「それは置いて。この烏涙、華琳様のため誠心誠意尽くさせていただきます。」

約一名除いて、全員が笑顔で迎えてくれた。

◆

烏涙の顔合わせが終わり広間には今、私と一刀しか居ない。

あの娘が司馬防の娘・・・。

ふふふっ、思い出すだけでも笑みがこぼれる。

「どうしたんだ華琳？急に笑い出して。」

「これが笑わずにいれるわけが無いわ。ねぇ一刀、私は前に一瞬だけあの娘と目が合ったのだけどその時に烏涙がどんな顔をしていたか分かる？」

「？　さぁ、俺に分かるはずないだろ。」

町に行った時を思い出す。そういえば桂花もあの時見かけたわね。

「その時ねあの娘、獲物を見つけたような獰猛な笑みを浮かべていたわ。ふふふっ、司馬防の言うとおりとんだじゃじゃ馬よ。誠心誠意尽くすって？あの娘、誰かに仕えるような女じゃ無いわよ。」

「なっ！ならなんで・・・」

一刀の言葉を途中で遮る。

「簡単な事よ。あのような者でも御するというのが王と言うものよ。それに・・・」

「それに…？」

「かわいいじゃないあの娘。春蘭とはまた違った烏の濡れ羽色の黒髪やあの華奢な体。はぁ…どんな声で鳴くのかしら・・・。」

「あぁ、そうだったな。華琳はそういう趣味だったな。」

一刀が呆れたように言う。話に聞いたよりも可憐なその容姿。

しかしその胸の内に野心を燃やしつつ、それをまるで感じさせない程の面の厚さ。

正直、あの時目が合っていなければその野心に気づかなかったでしょう。

いいわ、烏涙。あなたが私に牙を向いたとき、全力を持って相手させてもらうわ。

◆

私が軍師となって数日。

華琳が刺史から州牧に昇進するとかで早速、仕事が滝のように降り注いできた。

幸い、袁紹の所で毎日山ほどの仕事をこなしていたので苦にならなかった。

先日それらが落ち着いたので街へ視察しに行く事となった。

メンバーは華琳、春蘭、秋蘭、北郷、私の計五人。季衣は賊のアジトが・・・アジト？ともかく見つかったらしいので討伐に、桂花はお留守番ということ。

自分が華琳と共にいけないのが悔しいのだろう、最後まで桂花は北郷に恨みがましい視線を送っていた。

街に来た後は手分けをして視察する事となった。

せっかくなので視察しつつ、この街に居るはずの命を探していたのだが、

「あら、もしかして司馬懿ちゃんじゃないの？」

「？・・・あっ！おひさしぶりです。命がお世話になりました。」

声をかけてきたのは以前命を護衛として雇ってもらった女商人だった。

「どうやら何事も無かったようですね。」

「ええホントよ。盗賊に襲われかけたんだけどね、郭淮ちゃんが武器で追い払ってくれたのよ。しばらくはお肉食べれなくなったんだけどね。」

「ははは・・・ご愁傷様です。ところで命は？」

「郭淮ちゃんのこと？郭淮ちゃんなら此処に着いてからすぐ、お医者さんの情報が入ったーとかでまたどこかの街に行ったわよ。」

「そうですか・・・。ありがとうございます。そろそろ行きますね。」

「はいよ。あたしも引き止めて悪かったわね。」

「いえ、それでは。」

幸いな事に命の情報が入った。しかし陳留には既にいないらしい。命に会うことを楽しみにしていた桂花がこの事を聞くとどうなるだろうかと考えて、

「あっ、桂花に御土産買わなくちゃ。」

最後に御土産を買い、華琳達と合流したのだが・・・

「・・・」

「・・・」

「・・・ねぇ北郷？」

「なんだ？」

「私も竹かご買ったほうが良かったのかしら？」

「俺に聞かれても困る・・・。」

なぜか私以外のメンバーは竹かごを買っていたことが印象的だった。

◆

視察の報告書を提出した帰り、北郷に声をかけられた。

「烏涙、おまえも報告書出したのか？」

「ええ。それでどうしたの？」

「夕飯はとったか？まだなら一緒に食べないか？」

そういえばお腹が空いたと思い同意した。

「で、なぜ私を誘ったの？」

「ああ、俺と烏涙ってあまり話してなかっただろ？いい機会だとおもってな。」

私がボロを出さないよう、あまり話さないようにしていたのだから当然だろう。

私が転生したという事実は隠しておきたい。うっかりカタカナの単語一つでも使って疑問を持たせる事など論外だ。

二人の目前にあるのは二皿の炒飯。共にいただきますと食前の挨拶。

「なぁ、烏涙は何で軍師になったんだ？」

「いきなりね。夢を叶えたいからよ。ただそれだけ。」

「へぇー。その夢って？」

「教えれない。」

そっかと残念そうに言い北郷は炒飯を口に運ぶ。追求はしてこないらしい。そっちのほうがこちらとしてありがたい。

「北郷は・・・」

「ん？」

「北郷は何故、華琳様の下にいるの？」

「んぁ～そうだな…最初はこの世界に来てから、右も左も分から

ない俺を拾ってくれた華琳に恩を返したいという理由だったんだけど・・・」

「けど？」

「今は恩とかそういうの抜きで華琳たちの為になりたいんだ。・・・と言っても、俺は春蘭や季衣みたいに強いわけでもないし、桂花や烏涙みたいに頭が良いわけでもなく、あるのは天の知識ってやつだけなんだけどな。それでも皆の為に何かをしたいんだ。」

そう語る北郷の表情は輝いて見える。

「そう。ならがんばる事ね、私は応援するわ。ご馳走様。」

北郷よりも早く食べ終わったので椅子から立ち上がり皿を片付ける。

「じゃあね、北郷。また明日。」

「おう、また明日な。」

私は北郷と分かれ部屋に戻る。

まだ少し残っている仕事を終わらせながらつい考えてしまった。

（はぁ・・・北郷ね・・・。前世で会えたらよかったのに・・・。）

今日は久しぶりに前世が愛おしくなった。

九、　仕官と御使い（後書き）

烏涙城陥落の予定はございません。

十、　苦戦と再開

「許緒さま！街が見えてきました！義勇軍と賊が交戦しております！」

「わかった！みんな！街は目の前だよ！全軍、全力前進！」

季衣の号令で軍が駆け足になる。

「烏涙、どうだった？」

「この暗さで人数までは分からないけど、賊の集まっている一箇所一箇所はそこまで多くは無いみたい。この戦力なら一点に集中すれば簡単に街に入れるわ。でも・・・」

「街に入った後が問題・・・それに敵の本隊が見当たらぬか。かなり苦戦するだろうな、華琳さまへ伝令を送ろう。」

「それがいいわ。」

現在は日が沈んだ直後、その中を季衣が指揮、秋蘭と私が補佐で軍を率いて進軍中である。

軍といっても数は多くは無い。先発隊だからだ。

以前から出没していた黄巾の賊が近頃大量に大陸のいたるところに出現し、かなりの被害が出たところでようやく都から黄巾の賊を平定せよと軍令が来たのがつい先日。

大軍を率いる理由が出来たので準備を進めていたところに、今までに無い規模の黄巾の賊が出現したと情報が入った。

準備が終わるのは次の日となってしまうが何もしない訳にも行かず、華琳は季衣に先発隊を率いらせた。

「弓兵隊、構え！」

「・・・・・・秋蘭さま！」

「いや、まだだ・・・今だ！矢を放て！」

秋蘭の号令と共に弓兵隊が賊共へ矢の雨を降らせる。

「全軍、突撃！突撃ー！賊共なんかに手加減はいらないよー！」

先発隊と賊が激突する。

止まぬ雄たけび、むせ返るような血の臭いが辺りを支配し始める。

状況はこちらが圧倒的に有利だ。練武の差やこちらの勢いや相手の背を突いたのが幸いした。だが・・・

「妙にあっさりしてるわね・・・。秋蘭、なにかおかしいのが見えない？」

違和感を感じた為、秋蘭に確認してもらう。

「む、少し待て・・・横に逃げていく？」

「？　どう言う事ですか、秋蘭さまー？」

「おどろいた。義勇軍が我々に気づいて、こちらに会わせた様だ。」

「えっ？でもこの暗さですよ。敵と見間違えたら・・・」

「違うわ季衣、恐らく賊共の動揺で気づいたのよ。」

「烏涙の言うとおりだろう。どうやら義勇軍には優秀な指揮官がいるみたいだな。」

「え、え～と・・・」

季衣は理解できていないみたいだ。まあ、こちらの説明の内容をはぶりすぎたのも理由だろう。

「考えるのは後、一気に攻めましょう。」

「うん！」

もう少しで街に到達するところで急に大きな声が聞こえた。

「はぁ！！」

その声と共に光が走り、賊をなぎ倒した。

光が走り、賊をなぎ倒した。

光が走り

「いったい何が起こったの・・・？」
呆然としている私に秋蘭が答える。
「あれは恐らく氣だろう。」
「えっ！知ってるの！」
「ああ。といっても見るのは初めてだが。」
気？　気ってやっぱりあれかしら。かめはめ〇とか波動〇とか？
予想外に慣れた私でも流石に驚いた。
しかし、だからといって何時までも呆然とするわけにも行かない。
「こっ、この機を逃すな！攻めよ！」

◆

「お待ちしておりました！皆さんこちらに！」
街に着き、怪我の多い女性に街の中央へと連れられた。
「凪ちゃん！その人たちは誰なの！？」
「軍だ！軍が助けに来てくれたぞ！」
「なんやて！なら助かったも当然やな！」

大きな三つ編みの眼鏡をつけた女性となぜか関西弁の女性が喜びの声を上げる。しかし・・・

「ごめん・・・ボク達は先発隊なんだ。」

「すまないが本隊が来るのにはまだ時間が掛かる。」

「な、なんやって～。いや、先発隊でも十分ありがたいわ。」

「そ、そうなの～！このまま誰も来てくれなかったら私達は終わってたかもしれないの！」

四の五の言ってられない状況なのだろう。悲観せずにすぐ立ち直る。

「そう思ってくれるほうが此方としてもありがたいわ。自己紹介は手短に終わらせましょ。」

「せやな。ウチは李典て言うんや。残りは于禁と楽進や。あと一人居るんやけどまだ来とらん見たいやな。」

「よろしくなの。」「宜しくお願いします。」

「ボクは許緒。二人は夏侯淵さまと司馬懿だよ。」

「宜しく頼む。」「よろしくね。」

自己紹介を終わらせ秋蘭が話し始めるが、

「では、状きょ…」

「軍が来てくれたのー！？」

秋蘭の言葉を遮りながら此方へ来るのは走っているにも係わらず妙に青い顔とアルビノ特有の色素の抜けた髪と赤い目が特徴の女性

「命っ！命なの！？」

「えっ？烏涙ちゃんなの！？」

なんと命がいた。命はうれしそうにこちらへ走ってくる。

「烏涙ちゃん！ひさしっ、ケホッケホッ。」

「ああもう、せき込んでいるじゃない。」

「郭淮ちゃんって司馬懿さんと知り合いなの？」

この于禁の様子からして命はこの三人と知り合いなんだろう。

「郭淮といったか。再会のとこすまないが、話を再開するぞ。」

「あっすみません。」

「よし、では今の状況はどのぐらいまで分かるか？」

「はい。賊共はまず、南から攻めてきました。そこから敵部隊が別れ、四方から攻められましたが夏侯淵さま達のおかげで、北方向の賊は一掃できました。」

「せやけどまだ油断はできひんで。あいつらがまた北の方に送り込むかもしれん。」

「街の被害状況は？」

「防壁がうまく機能してるけど少ないとは言えないの。」

状況は絶望的。だが防衛戦に徹すればどうにかはなる。

「烏涙、配置はどうするの？」

「今から言うわ。まず、一番攻撃の激しい南側には秋蘭と楽進を。東側には季衣と于禁を。西側には命と私。警戒が必要な北側には李典一人に配置してもらうわ。異論は？」

「問題ないだろう。」

「そう。秋蘭達は兵を多めに連れて行って。李典は異変があればすぐ知らせて。」

「了解した。」「わかったで。」

秋蘭が皆を見渡して言う。

「いいか、一晩だ。一晩耐え切れば、恐らくわが軍の本隊は到着するだろう。何としても耐え抜くぞ。」

◆

「はぁ！」

閉じた鉄扇を敵に振るう。

「ぎゃあ！」

骨を砕く感触、これで何度目だろうか。賊の数は減るところを知らない。

「烏涙ちゃん！左に避けてっ！」

命の言うとおり左に避ける。命の撃った矢に当ったのだろう。賊の足が吹き飛んだ。

「た、たすけてっ・・・！」

「ばっ馬鹿やろう！離しやがれ！」

足の無くなった賊が仲間の足を掴んでいる。

そのチャンスを逃すはずが無い。

気をとられている賊の頭蓋を砕き、足元の賊は頭を踏み潰す。

西側でこの敵の数だ。南側はどうだ？秋蘭達は大丈夫か・・・いや守備に関しては魏で一番の将だ。心配は要らないだろう。

しかし敵の数は目算でも減っていない事が分かる。対して此方は少しずつだが兵が減少していく。

「戦えないほど負傷した人は本陣に戻って！みんな！耐えるだけじゃなくて生き残ることも考えて！」

命の言うとおりだ。この戦いを乗り越えても街が再起不可能なほど住民が死んでしまっては元も子もない。

命はなるべく負傷した兵を助けるように弩砲を放っている。

「貴様らっ！黒いヤツよりも白いヤツを優先しろ！あいつの方がやっかいだ！」

「ちっ・・・命には触れさせないわよ！」

なるべく命が目立たぬよう前線で戦っていたが、余計な一言で私を無視してでも突破しようとする輩が出てきた。

今は明け方、しかしあまり明るくは無い。足元には無数の死体。状況が悪すぎる。

「一旦下がるわ！足を動かせないものは近くのものに手伝ってもらえ！」

このままでは押されると判断し、兵達を撤退させる。

なんとか本陣に戻れたが被害は大きい。

「烏涙、お前達もか。」

「秋蘭、あなた達も下がってきたのね。」

「その通りです。ご無事でなによりです。」

「もう僕、腕がしびれて動かせないよ。」

急に秋蘭さまー！と声が聞こえてくる。季衣の声だ。

「もうへとへとなの～。」

于禁と季衣がやって来た。東側も下がってきたようだ。

程なくして李典も来た。

これで全員が本陣に戻ってきた事になる。

「どうするんや？東の防壁は残り一つ、さらに脆いときたもんや。」

まさに手も足も出ない。だが・・・

「秋蘭、ありったけの矢を準備して。」

「？　どういうことだ、烏涙。」

于禁があわただしく走ってくる。

「た、大変なの！街の外で大きな砂煙！大部隊がこっちに来てるの！」

「なるほど、そういうことか。」

「秋蘭さま、どういうことですか？」

「報告です！大部隊の旗印は曹と夏侯、お味方のようです！」

「こういう事だ。弓を構えろ！矢を放て！味方に見えるようにな！」

「みんな！反撃開始や！」

「命、もう一頑張りよ。」

「うん。烏涙ちゃんもがんばって！」

◆

「桂花ちゃーん！ひさしぶりー！」

「命じゃない！？どうしてここに居るの！」

「みんなの手伝いをしてたんだー。」

本隊が合流してからは一方的だった。

今までの苦戦が嘘のようにひっくり返り、戦いはあっという間に終結した。

「そういえば命、華佗には会えたの？」

「うん！どう？変わって見える？」

そう胸を張る命はいつもどおり白い肌、そして赤みの無い顔。

「まったく変わって見えないけど。」

桂花が呆れたように言う。

「えへへ。これでも一応、寝床の上にずっといなくちゃいけない日が無くなったんだよ。まあ、咳とか周りの温度に気をつけないといけないけど。」

さすがの華佗ですらも完全には治せなかったようだ。しかし命は十分に嬉しそうだ。

「あなたが郭淮なの？」

「えっ？曹操さん！あっ、はい。そうですけど・・・」

華琳がこちらに来た。あの三人娘との話は終わったようだ。

「華琳さま、もしかして？」

「そのとおりよ、桂花。早速だけど私の軍に入る気は無いかしら？」

「ぼっ僕ですか！？え～と何でですか？」

「あなたの活躍を聞いたからよ。あの三人は同意してくれたわ。」

「なら後で真名を交換しないといけませんね。」

楽進と李典と于禁の三人は予想通り軍に入ったようだ。

桂花が言うには種馬の下に着いたらしい。・・・たぶん北郷のことだろう。

「入りなさいよ、命。一応治してもらったのだから大丈夫でしょ。」

「桂花・・・。いいんですか？僕体が弱くて迷惑かけるかもしれないですよ。」

「それは同意と受け取って良いわね。安心なさい、その程度で受け入れないほど私の器は小さくないわよ。」

命はしばらく黙った後、決意を固めた顔をした。

「わ、わかりました。曹操さん、僕の真名は命といいます。」

「命、ね。私の真名は華琳よ、以後そう呼びなさい。」

「はいっ！わかりました！」

「そうね・・・烏涙の下ならもしもの時にも問題は無いでしょ。烏涙もいいわね？」

「かまいません。」

「よろしくね、烏涙ちゃん。」

どうやら命は私の下に配置されるようだ。これは都合が良い。だ

が桂花はこちらをうらやましそうな目で見てくる。仕方が無いだろう。今回のようにもしもの時は私も前線に出るのだから。

「じゃあ命、みんなの所に行きましょ。真名を交換しないと。あっでも男には渡さなくて良いわよ。」

「あっ桂花ちゃん、ひっぱらないでよ～。」

「・・・。」

「どうしたのです、華琳様？」

なにやら意外そうに桂花たちを眺めていた。

「いえ。ただ桂花が私以外の人に執着してるのがね。」

「嫉妬ですか？」

「ふふふ。そう見たいね。」

そう言って華琳は命たちを微笑ましそうに見ていた。

・・・命がそちら側にも染まらない事を切に願った。

十、　苦戦と再開（後書き）

帰ってきた命。
でもやっぱり病弱。

十一、　留守番と狗

「暇ね。いや暇じゃないけど。」

あれだけ大陸を騒がせた黄巾の乱も終わる時はかなりあっけなかった。

最終的には二十万と軍に匹敵する数に膨れ上がっていたが、間抜けな事に食料も武器が全く足りてない上、指揮系統がぐちゃぐちゃという有様。

これはもう自滅に等しい。そして火を放つとダメ押し。

賊の頭の張三姉妹はあえなく御用となった。

部屋のドアがノックされる。そういえばこれ、北郷が広めたらしいわね。

「入りなさい。」

「はっ。」

外から文官が入ってくる。

「用件は？」

「数え役満☆姉妹たちが資金が減ってきたと。」

「それはすでに用意してあるわ。・・・これね、もって行きなさ

い。」

「はっ。」

文官が出て行く。

さきほど文官の言った数え役満☆姉妹とは実は張三姉妹の事だ。

張三姉妹は旅芸人で、歌っていたらいろいろ集まり、それに便乗した盗賊やらであのような騒ぎになったらしい。

華琳はそのカリスマに目をつけ、張三姉妹の情報がほぼ不明なことを利用し、わざと生かし軍の増強に利用した。

そして今では領内のあちこちでコンサートを開き、曹操の所の客寄せパンダの役割をしている。

張三姉妹の人気はすごく、実際に志願してくる人が多くなってきた。

「本当はこの仕事、北郷のなんだけどね・・・。」

ちなみに命は警邏中だ。

現在、陳留には私と命しかいない。

その理由は数日ほど前にさかのぼる。

◆

「全員そろったわね。」

広間に華琳の声が響く。その声に私が答える。

「はい。誰一人欠けておりません。」

「そう。まずは・・・流琉、顔を合わせていない人もいるだろうから紹介なさい。」

「はいっ。私は名を典韋と言います。真名は流琉です。武将として仕官する事になったので皆さんよろしくおねがいします。」

「あとでお前達も流琉に真名を教えておきなさい。・・・さて、本題に入るわ。反董卓連合のことよ。」

「あれは参加するって決めたんじゃないか？」

「ええ、一刀の言うとおりよ。私達はこれを利用し世に名を知らしめる。」

華琳が話すのを見る皆の顔は真剣そのもの。

「そしてその後の事よ。都が落ちることによって抑止力がなくなり戦乱の世となるわ。その時のために烏滸、あなたにはここに残ってもらうわ。」

「なっ何故ですか！？」

思わず声を荒げる。この同盟は各国が集まる、つまりあの劉備や孫策など未来の英雄が集まるのだ。

それに引き抜けはしなくとも、何れかの将とつながりを持っておきたい。

「あなたになら頼めるからよ。地盤固めにもしもの時に指揮をとるにはあなたが一番適しているのよ。」

「くっ・・・！　わかりました。華琳様がいない間は私にお任せください。」

「たのんだわよ。命は残しておくわ。・・・そうね、コレが終わったら何か欲しいものを叶えてあげる。それでいいでしょ。」

「その言葉、忘れませんよ。」

「当然よ。ふふ、閨のことでもかまわないわよ。」

皆の前で堂々と言う。セクハラでしょこれ。

「謹んで辞退します。」

「あら、つれないわね。」

こうして私は命と二人、留守番となった。

◆

「はぁ～せめて引き抜けそうかどうか見ておきたかったのにねー。」

現在仲間に引き入れれる人数は二人。

奏はもう引き入れたも当然で命はついて来てくれるだろう。

「さすがに少なすぎるわよね。」

またため息を吐いてしまう。

いずれ大陸一となった魏と戦うのだ。優秀な将は最低でも五人は欲しい。

他国から引き抜こうと考えるがつながりが無いとなるとどうしても難しい。引き抜いても華琳に忠誠を持ってもらったら本末転倒だ。

だからといって魏からも無理そうだ。

将が全員華琳に忠誠を誓っているのだ。引き抜くのは明らかに無理だろう。

となると

「未来の有望株を探そうかしらね。」

軍にいて、名の上がっていない有名な将を探す事にした。

「武将がいいけど一人くらいは軍師も欲しいわね。」

思い浮かぶのは?艾。たしか武将になる前は文官だったはずだ。

智も武も申し分無し。

何としてても引き入れたい。

（まだ名を上げてないなら今は文官よね。）

反董卓連合のことはさっさと忘れ、？艾探しへと没頭した。

◆

現在は書庫。？艾探しの最中だが、

「いえ、知りません。」

「そうか、ならいい。」

「申し訳ございません。」

「気にしなくて良い。」

見つからない。一体、何人に聞いただろうか？

「はぁー。もしかしてまだ働いてない？それは無いはずだけど・・・」

「はぁー。」

ん？　私のため息では無いよね。

遠くを見たらそこには半袖半ズボンの軍服のような服を着ている少女がいた。

「おい、そこの。」

「なんでしょうか？」

「あいつは誰だ？」

なんとなく気になったので近くにいた者に聞いてみる。

「確か・・・〝犬〟でしたはずです。」

「犬？　どういうことだ。」

「いえ、詳しくは私にも・・・。犬と呼ばれている事と後・・・落ちこぼれと言われていた気がします。」

「そうか、わかった。もう良いぞ。」

「はっ。」

犬・・・犬ねぇ・・・もしかしたら・・・いや、落ちこぼれと言ってたな。しかし・・・

「まぁいいわ。まずは確かめましょう。」

私は〝犬〟とやらに話しかける事とした。

「ねぇ、あなた。名前を教えてくれる？」

「はい？いったいだれ・・・うっ嘘！司馬懿さま！」

「嘘じゃないわ。失礼ね。」

「申し訳ございません！」

「別に良いわ。それと、声をさげて。ここは書庫よ。」

「了解であります！」

「・・・。」

ビシッと敬礼のポーズ。見た目的にジークハイルとか言いそうで怖い。

「まぁいいわ。で、名前は何？」

「はっ！私めは諸葛誕、字を公休と申します！」

しめた！犬の一言でピンと来たが正解だったようだ。だが、

「あなた諸葛よね。なんで落ちこぼれと言われているの？」

そう、そこだ。諸葛一族の上、魏で優秀とされたのに落ちこぼれはおかしい。

「それは・・・」

諸葛誕が語る。

「私めがそう、周りに言ったからであります。」

あ。声が小さくなった。

「なぜ？」

「そうに違いないからであります。私めの周りは龍や虎と称されているのいるのに・・・。」

ああ。なんとなくわかった。龍は蜀の諸葛亮で虎が諸葛瑾のことだろう。

たしかに周りが龍やら虎と称される中、自分だけ〝狗〟と称されたら悪い方に勘違いするのも無理は無い。

（このままじゃ駄目ね・・・。なんとかして自信をつけさせなければ。）

今のままでは私が誘っても「私めでは・・・」と言って無理だろう。

（なんとかして・・・こう・・・、狗と言う言葉に好印象は与えられないかしら・・・。）

一つ思いついたので実行してみる。

「ねぇ諸葛誕、このような場合はどうすればいいか教えてくれるかしら？」

私は本棚から適当に本を取り出し諸葛誕に見せて問う。

「この場合でありますか？その場合はこのようにすれば良いか

と。」

「ならばこれは？」

「それはここをここに配置すれば問題無いかと。」

「じゃあ・・・」

数回ほどさまざまな質問をしたが諸葛誕はなかなか優秀だった。

だが目を見張る所はそこではない。

「あなたとっても自信が有るじゃない。先程と大違いよ。」

思わず笑ってしまう。それを勘違いして捉えたのか諸葛誕は謝ってきた。

「もっ申し訳ございません！私めなどが出過ぎた真似をっ！」

「完璧よ。」

「えっ？」

驚いたのか目を丸くする。

「諸葛誕、何故あなたが狗と例えられたか分かる？」

「いえっ！私めには分かりません！」

「私はさっき〝この様にしたい〟とは聞かず〝どうすればいい〟

と聞いたわ。その場合は普通、人によって全く答えが違うわ。」

「は、はぁ。」

「そしてあなたは私の望む答えを出してくれた。私達は今日始めて話したにも係わらず。」

そう、諸葛誕の答えは私が欲していた答えと同じだった。それも全てが。

「それがあなたが狗と称される由縁のはずよ。けっしてそれは戯称などでは無いわ。」

「しかしっ！そうだとしても私めの周りは…」

「龍と虎。だったかしら？」

「は、はい・・・。」

「考えて見なさい。龍や虎を人が飼えると思う？できないわ。人の手には余るもの。それに比べてあなたは本当に優秀よ。必ず主の望む結果を出せるのだから。」

私が話を進めると、どんどん諸葛誕の顔が笑顔になってくる。嬉しくてたまらない、そのような感じだ。

「あなたは他の二人とは違って、飼われて初めて力を発揮できるの。諸葛誕、私の下につきなさい。私があなたを使いこなしてあげる。」

「かっ感謝の極みであります！司馬懿さま、どうか私めを真名で…狗とお呼びください！」

（完璧のようね。ここまで上手くいくとは思いもしなかったわ。それにしても真名まで狗って…）

内心でほくそ笑む。これでまた一つ夢に近づいた。

「なら私も真名を教えないとね。これからは烏涙と呼んでくれるかしら？」

「勿論であります！烏涙さま！」

「まあ、正式に私の下につくのは時間がかかるでしょうけどね。これから宜しくたのむわ。」

「はいっ！」

狗は敬礼をしてはきはきと言う。目が輝いて見えるのは気のせいでは無いだろう。

余談だか狗が大きい声で返事をするたびに遠くから嫌そうな目で見られたのはしょうがないだろう。

◆

「暇ね・・・本当に・・・。」

私は未だに留守番の最中。仕事が山ほどあると思いきや今はそこまで無い。

原因は狗だ。あれから予想以上に懐かれ、向こうから仕事をねだって来る様になった。

一応回せる仕事は渡しているが、明らかにそれ以上の仕事を持っていく。

注意はしておきたいが仕事はすべて完璧にこなしたり、私の負担がかなり減ったとなるとあまり強く言えない。

コンコン、とノックの音がする。

「烏涙さま！私めにございます！」

「入っていいよ。」

「失礼します！」

相変わらずとはきはきとした声だ。あの小さい体でよく出せると思う。

「烏涙さま！私めに命令はございませんか！」

「無いわ。回せる仕事は回したし、それにあまり頼みすぎると怠け癖がついてしまうわ。」

「そうでありますか…。」

ああもうすぐ悲しそうな顔をする。忠犬って処じゃ無いわね。

「あなたは働きすぎよ。少しは…」

コンコン、ノックの音に言葉を遮られる。

「烏涙ちゃん、入って良い？」

「あ、別に良いわよ。」

訪問者は命みたいだ。

「はーい。烏涙ちゃん、これ報告書。」

「お仕事、ご苦労様です！命殿！」

「狗ちゃんもね。」

命と狗は先日ほど真名を交換している。狗が渡した理由は「烏涙さまの御親友ならば真名を渡さぬ理由なぞありません！」だと。

「あとこれはお土産だよ。こっちは狗ちゃんの分。」

「ありがと。」

「ありがとうございます！」

現在は命のお土産が楽しみの一つになっている。

一応私は華琳がいない間、代理をしているようなものだからなかなか街には出かけれない。

あっと命が声を出す。

「あと、華琳さまから連絡があるんだった。」

「何？おしえて。」

「うん。虎牢関での勝利は曹操軍の活躍のおかげって民衆に広めておいてって。ちなみに一刀の提案らしいよ。」

ふーん、意外。たしかに風評は大事な事だ。

「了解、情報の事なら誰にも右に出させないわよ。」

「流石です、烏涙さま！」

「ははは、まだ烏涙ちゃん何もしてないよ。」

狗の言葉に苦笑しながら命が答える。

「ケホッケホッ。じゃあ僕は部屋で休んでくるね。」

「また咳出してる…。しっかり休みなさい。」

「うん、じゃあまたね。」

「はいはい。」

「命殿、お大事に！」

命が部屋を出て、ドアが閉められる。

さて、せっかくだからただ広めるじゃあなくて、何か仕込めないかしら・・・。

たしか北郷の案よね。北郷・・・御使い・・・そうね、コレならもしもの時に利用できそうね。

「狗、やってもらいたい事があるのだけど。」

「なんなりと！」

「虎牢関の勝利は曹操軍の活躍のおかげと民衆に広めなさい。そしてココが大事よ、いつの間にか天の御使いのおかげで勝利したとなるようにしなさい。当然、御使いは曹操軍の下にいるという事も忘れずに。」

「了解であります！」

「いい、この事は他言無用よ。」

策に足跡を残してはいけないのだから。

十一、　留守番と狗（後書き）

新オリキャラ登場
投稿したと思ったらしてなかったでござるの巻
このごろ執筆速度が落ちてヤバイ
の三本でおおくりします。

十二、　帰還と服

「三人とも、終わったみたいね。お疲れ様。」

目の前にいる三姉妹に労いの言葉をかける。

「ふふん、今回はやりがいがあったわよー。」

「いっぱいお客さん来てくれたね～。」

「烏涙さん、私達を呼び戻した理由は？」

誇らしげに笑うのは地和。嬉しそうに微笑むのは天和。表情をあまり変えないのは人和。

この三人娘こそが大陸を騒がせた黄巾の首謀者であった張三姉妹だ。

もっとも、その張三姉妹は世間では死亡したとなっているが。

「そう急かさなくても言うわよ。大事な知らせがあるのよ。」

「大事なお知らせ？う～ん。お給料が上がるとか？」

「そうなるかも、知れないわね。」

「それホント！？やったわね天和姉さん、人和！おいしいものがもっと食べれるわよ！」

「待って、地和姉さん。烏涙さんはかも、と言ったわよ。」

「え～と。どういうこと、烏涙ちゃん？」

「次回からは専用の舞台と事務所が用意されるわ。」

三姉妹少しポカーンとした後、天和と地和が大喜びした。

「地和ちゃん、人和ちゃん、聞いた！私達の念願の舞台よ！」

「それだけじゃないわ！事務所もあるのよ！きっと広いんでしょうね！」

天和と地和は妄想にふけている。まぁ本当の所、そんな大きい舞台や事務所は用意できないでしょうけどね。北郷が非難を浴びる姿が想像できる。

「それで、給料が上がるかもと言うのは？」

「今までは路上で無料公演だったでしょ。これからは有料公演になるの。客にお金を払わさせてあなた達の公演を見せるの。当然、入ったお金はあなた達に回るわ。」

「なるほどね。人気が出たら給料が上がり、無ければ下がる。そう言う事ね。」

「それはある意味、ちぃ達への挑戦ってことね。見てなさい、ばんっばんっ稼いで見せるわよ！」

「お金がいっぱい入ったらどうしよう～。お料理もいいし服もい

いわね～。」

（初公演となると、やっぱり第一印象が大切よね・・・。派手に宣伝すればいいかしら？今度、担当者が一刀に戻るから資金は気にしなくてよさそうね。）

地和はやる気を見せ、天和はまだ妄想している。人和は初公演にむけて対策を練っているのだろう。

「お知らせはこれだけよ。長旅だったはずだからしっかり休んでおきなさい。本番に体調不良なんてただの笑いものよ。」

「分かってるわ。烏涙さんも気をつけて。」

「地和ちゃん、お金入ったら何に使う？」

「はいはい天和姉さん、分かったから行くわよ。」

三姉妹は話し合いながら部屋を出る。

さて、そろそろ華琳達が帰ってくる頃ね。あとは狗の報告を待つだけ・・・

ノックの音が響く。早速来たようだ。

「失礼します！烏涙さま、曹操さま達がお戻りなされました！」

「分かったわ。はぁ、ようやく街に出れるわね・・・その時は狗も来るかしら？」

「お供いたします！」

お供って・・・。狗の言葉に苦笑いしつつ、街に出るときは少し羽目を外そうかしらと考えつつ、華琳達の下に急ぐ。

◆

「華琳様、此度の遠征ご苦労様でした。」

鎧を外している華琳に話しかける。その華琳の近くにはさらしを巻いた女性がいる。

「ええ、烏涙はどうだったの？」

「やはり大部隊を率いての遠征でしたので少々賊が湧きましたが、全て問題なく終わらせました。兵の増強も三姉妹の成果が出ているようです。」

「そう、ご苦労だった。それで、望みのものは何がいいかしら？」

「覚えてはいましたが、考えてはおりませんでした。なにせ仕事に追われる日々でしたので。」

「ふふふ、よく言うわ。まあいいわ、何にするか決めたら言いなさい。可能な範囲なら叶えてあげるわ。それと、霞。」

「お？やっとウチの話かいな。華琳が留守を任せられるヤツってどないヤツかずっと気になっとってな、多分アンタやろ。ウチは張遼、字は文遠言うんや。よろしゅうな。」

なるほど張遼だったのか。に、しても・・・何故関西弁なのか。そのうち秋田弁とかも見つかるのではないのか？

「ええ、私は司馬懿、字は仲達よ。にしても、まさか張遼まで配下に加えるとはね・・・。」

「ウチもまさか部下になれって言われるとは思いもせんかったわ。」

「張遼ともあろうものを、部下に加えずに討ち取るなんてもったいないわよ。」

その言葉に私も張遼も苦笑いするしかない。

「あと烏涙、今度霞に街を案内しておきなさい。霞も警邏に参加させるから慣れさせておきたいの。」

「御意。あなたも華琳様の部下になったのなら真名を渡さないとね。私の真名は烏涙よ、これからはそう呼んでくれるかしら？」

「もちろんや。ウチの真名は霞言うんや、今度の案内よろしゅうな。」

「ええ。あとほかに何人か連れて行きたいけどかまわないかしら？」

せっかくなら案内ついでに買物とかを楽しみたい。呼ぶのは勿論桂花に命、狗の三人だ。

「別にかまわんで。むしろ多いほうが楽しっちゅうもんや。」

よし、霞もいいと言ったし早速誘いに行こう。

ちなみに華琳は気づいたら居なくなってた。多分部屋に行ったんだろう、かすかに桂花の「華琳さま～～」と声が聞こえてきた。

◆

「あぁ～その日は空いてないわ。すまないわね。」

「ごめんね、烏涙ちゃん。どうしても休みが取れないんだ。」

「申し訳ございませんっ！誠にっ・・・誠に申し訳ございませんっ！」

「と、言うわけで全員無理やったってことか。」

「ええ、まさか全滅とは思いもしなかったわ。」

今は事前に決めていた霞との待ち合わせ場所に二人で居る。

三人とも誘ったのだが誰も予定が合わなかったので結局霞との二人になった。

狗なんか本当に泣きそうな感じで謝られて、なんかこっちの方が申し訳ない気持ちになった。

「運が無かったと思って諦めましょ。霞、なにか行きたい所ある？」

「ん～これといってないから烏涙に任せるわ。」

「それが一番対応に困る答えなんだけど・・・。そうね、向こうから行きましょ。」

まずは買物などはせずに警邏で注意しておく場所などを霞に教えていく。

思ったより霞は真面目に聞いてくれるのでこっちとしても教えやすかった。

「ここは道がたくさんあって、ここに逃げられると厄介だから・・・逆に言えばここに逃げてくるとも言えるから、ここの道は頭に入れときなさい。」

「大体分かったわ。ほかに注意することあるん？」

「特にはもうな・・・」

「あっ、烏涙ちゃんと霞ちゃんなの～！」

これは沙和の声だ。なら多分真桜と凪も・・・

「いつもの三人娘に・・・あら、北郷も？」

「お？ホンマやな～。」

声がした方向へと向くと、沙和達三人娘と北郷がいた。四人はこちらに向かって来る。

「アンタら何してるん～？」
「隊長殿と買物に。お二人もお出かけですか？」
「いいえ、霞に案内をしてるの。」
「案内？あっそうか、霞はまだここの街に出てないからな。警邏の重要な場所とかか？」
北郷が正解を言うが沙和が声を上げる。
「隊長ー、そんなはず無いのー。」
「そうやで。女の子だけで出かけるなら、買物以外あらへんで～。」
「そうなのですか？」
「いいや、一刀の言うとおりやけど。」
霞が答えると凪が沙和と真桜にジト目を向ける。その沙和と真桜は驚いたような顔をしている。
「あ、ありえないの！せっかくのお出かけを警邏関係なんて！」
「ではお二人はまだ続けられるので？」
「いえ。覚えておいてもらいたい場所は回ったから、もう無いわね。」

「なら二人も一緒に来ないか？重要な場所は回ったんだろ？」

「おお！隊長それ名案や！」

「そうなの！今から服屋とか行くから二人も来るの！」

どうしようか悩む。正直今は服に興味は無いし、多分この面子では本屋には行かないだろう。

だけどやっぱり多い方が良いし・・・

「霞はどうする？」

とりあえず霞に聞く事にした。

「ん？ええんちゃう？多い方が楽しめるやろ。」

「と、言う事でついていくわ。」

「おう。そういえば次はどこに行くんだ？」

「服屋です、隊長。」

服屋かあ・・・。やっぱり買うものが無いな。そう考えていたら、

「烏涙ちゃんはどんな服が好きなの？」

「別に好きだとかは無いわね。特にこだわりはないし・・・。」

「それじゃあその服以外にどんなのがあるん？」

「無いわよ。これと同じのが合計で五着あるだけ。」

私が答えるとため息を吐かれた。

「なによ、別に良いでしょ服ぐらい。」

「あんなぁ～、服を笑うもんは服に泣くんやで！」

「なんだよその言葉・・・」

北郷は呆れているが沙和はその言葉にうんうんと頷いている。

「せやな、女の子がお洒落に興味ないってのはいただけんもんなぁ。」

霞がニヤニヤしながら言う。こいつ絶対に面白い事になりそうって顔をしている。

「どや、ここは誰が一番烏涙をお洒落にできるか競わんか？」

「はぁ？ちょっと・・・」

「それ良い案なの！」

「よっしゃ、ウチの腕前を見したるで！」

沙和と真桜は気合を入れ、霞はにししと笑っている。

「凪・・・。」

「すみません、この状態の二人は・・・。」

「北郷・・・。」

「あ～、あきらめろ。」

残りの二人は思ったより頼りなかった。

◆

「沙和、これはどうや？」

「そっちよりもこれが良いと思うのー。」

「二人ともいい加減にしたらどうだ。烏涙殿が困っているぞ。」

ただいま絶賛着せ替え人形中。先ほどから色々な服を着させられている。

ワンピースやらゴスロリやら・・・やっぱりこの世界の服の基準はおかしい。

「いいや、止めんで凪。お洒落せん烏涙が悪いねん。」

「そうなの。でも烏涙ちゃんに似合う服が見つからないの～。」

もう私は沙和と真桜になるがままにされている。凪は時々注意を入れるが二人は聞き入れない。

霞がさっきからしゃべっていないのはずっと笑っているからだ。
そんなに着せ替えされる私が面白いか。
そして北郷は・・・何処行った？もしかして逃げたのか？
「おーい、これはどうだ？」
そう言って北郷が戻ってきたが、その手にもってきたのはなんと・・・浴衣に和服。なぜそれがある。
「隊長～、それは似合う娘があまりいないからって人気があまり無い服なの。」
「いや、烏涙にこの服は絶対に似合う。」
そう言って北郷は期待の目を私に向ける。そんなにその服を着て欲しいのだろうか。
「なんや、けっこー自信あるな一刀。」
やっと霞が復帰してきた。だがまだひぃひぃ言ってる。
「ああ、烏涙はかなり日本・・・えーと天の国の人に似ているからな。」
「天の国ではその服が着られているのですか？」
「いや、昔だけど今でも見かけるぞ。」
へーと言いながら沙和と真桜が服を触。

「はぁ、分かったわよ。でもこれで最後にしてよ？」

そういって更衣室に入る。浴衣はともかく、和服は着方が分からない為、店員に着させてもらうはめになった。

『おお～～～。』

霞は感心したような顔をこちらに向け、北郷は少し誇らしげだ。

そして三人娘は、

「すごいやん隊長、ここまで似合うとは思いもせんかったわ。」

「ホントなの。私もこの服買おうかな～。」

「烏涙殿、似合ってますよ。」

かなりのべた褒めだ。さすがに恥ずかしくなる。

「一刀、当然アンタが買ってあげるに決まっとうやろ？」

「えっ、俺っ！？」

「そうやで隊長、ここで払うのが男の見せ場やで。」

「おい、真桜。」

「いいの凪。真桜ちゃんの言うとおりなの。」

「お、おう。烏涙、待ってくれ。」

驚いた。まさか本当に買ってくれるとは。しかし・・・

「いいわよ。このぐらい自分で買うわ。」

お金は使ってなかった分あるのだ。別に買ってもらう必要はない。

「いや、気にしなくていいぞ。真桜の言うとおりこれぐらいはさせてくれ。」

「そう、ならいいけど・・・」

「すみません、これいくらですか?」

「お金足りるの?」

「はい、こちらですね。この値段となります。」

「・・・。」

あ、北郷が固まった。

「まさか一刀、金無いんちゃうん?」

「いや。ただ、まさかここまで値を張るとは…。」

「隊長、足りないのなら私が・・・」

「いや、大丈夫だ凪!気持ちだけで十分だ!すみませんこれで!」

「いったの！」

「隊長・・・アンタ男や・・・。」

店員は意味が分からずひたすら苦笑いだった。

◆

「北郷、買ってくれた私が言うのも何だけどお金は考えて使いなさい。」

「はい、そうさせていただきます。」

北郷はあれから少し落ち込んでる。いっきに財布が軽くなったんだろう。

「でもあの時の隊長かっこよかったの。」

「あぁ、ありがとうな。」

「一刀、今度ウチがなんかおごっちゃる。」

きっかけを作ったと考えているのだろう。霞がそう言いながら北郷の肩をたたく。

「でもよかったやないか烏涙。そんな高いの隊長が買ってくれたんやで。」

「そうね。ありがと、北郷。大事に着させてもらうわ。」

「おう、そうして貰えると嬉しい。」

それから話をしながら六人で城に戻り別れた。

今は部屋で浴衣を着ながら鏡を見ている。

（お洒落もたまにはいいかもね。）

つい、そう思ってしまった。

今日はかなり充実した日だった。

後日、私が着ている服が北郷が買ったものだと知り、北郷にあの服にいったいなにを仕掛けたと絡んでいる桂花を見かけた。

十二、　帰還と服（後書き）

ああ、執筆速度が！執筆速度が！

恋姫恒例の新キャララッシュで誰かの影を薄くしないようにするのが大変。次回辺りから流琉の影が濃ゆくなるはずです

十三、　官渡と投降

「あの兵器の威力、すさまじい威力です・・・」

「投石器ね。まさかあんなに命中率が高いとは思いもしなかったわ。」

現在は袁紹軍との交戦中だ。

きっかけは袁紹と袁術が劉備の所へ侵攻していた所、劉備軍が華琳の領地を抜けて撤退したいと言ってきたことだ。

いろいろあったものの、華琳はそれを承諾。撤退した劉備軍を追撃するため進軍してきた袁紹軍と袁術軍を待ち受け、そのまま戦へ突入した。

俗に言う官渡の戦いだ。

まあ、袁紹軍と袁術軍は手を組んだが所詮烏合の衆。頭が無能な上、その二人が組んだのだ。連携など取れるはずが無い。

結果は御覧の通り。真桜の開発した投石器の活躍もあり楽勝である。あとは、

「烏涙さま！例の件の報告であります！」

「結果は？」

「見つかりませんでした！」

「そう。ありがと、狗。期待以上に早く済ませてくれたわね。」

「いえっ！烏涙さまのためなら当然であります！」

そう言って狗は戻っていった。

私が狗に調べさせていた事はこの戦場に奏がいるかどうかだ。

なぜ調べさせたかと言うと、史実ではこの戦いで張？が袁紹に騎兵隊で曹操軍の背後を錯乱させる作戦を進言したがそれは受け入れられなかった。

ならこの世界でも作戦は受けられていないか？結果は狗の報告で分かる。

袁紹は受け入れたのだろう。まあ史実とは違い、袁紹は苦戦している為ありえなくは無いだろう。

奏ほどの武将を戦場に出させず遊ばせておくはずが無い。

とりあえず華琳へ報告だ。

「華琳様、一つよろしいですか？」

「なにかしら？言いなさい。」

「先ほど、張　が戦場に見当たらないと報告を受けました。恐らく・・・・」

「我々の背後を取るつもりですね～」

「ああ。恐らく撹乱だろうな。」

私の言葉に割り込んできた気の抜けるような声は風、背が小さく頭に太陽の塔のような人形を乗っけている少女だ。

それに続いたのは凛、眼鏡をかけており真面目な雰囲気が出ている女性だ。

風と稟と言う名は真名で、風は程、稟は郭嘉だ。

彼女達は劉備軍とのいざこざの前に、軍師として仕えるようにと華琳に言われたのだ。

その際、稟が鼻血を盛大に噴出し皆を慌てさせたことは印象的だった。

「なぁ、何で居ないというだけでそこまで分かるんだ？」

北郷が疑問の声を上げる。

「それが一番効率的だからよ。顔良を除いて馬鹿ぞろいだけど、奏・・・張？なら思いつくでしょうね。」

「それに強襲の場合、兵を多めに割かないといけない上、時間がかかりますからね～。」

「まあ袁紹軍は数は多いですし、撹乱されたら多大な被害は免れないでしょう。」

桂花、風、稟の三人で北郷に説明をする。

「でも、本当に麗羽は馬鹿よねぇ。もうあまり意味が無いというのに・・・。」

「強襲にしても撹乱にしても既にばれているからなぁ。」

「それだけでは無いのよ。本来なら私達は既に撹乱されているはずよ。」

「張？は有能らしいしね、大方作戦は進言してたけど受け入れられず。戦況が危機に陥ってきたから麗羽は急遽張？に指示をだしたってとこかしら。」

「その張？ってやつも大変そうだな・・・。」

まったくだ。けどここで対処すれば、さすがの奏も投降するでしょうね。今の奏が袁紹に失望してないはずが無い。

「では後方に兵を回しなさい。念のため、側辺から来る事も考えるように。」

「・・・・・・・ぐぅ。」

「おい風寝るな。」

「・・・おおっ！寝てませんよ、お兄さん。」

北郷はすっかり風の起こし係になっている。

それにしても呆気無い。いや、最初から勝負がついているとはいえ、ここまで楽勝というのはなんだか・・・こう・・・気持ちが悪い。

この時の私達は袁紹がどのような人物か忘れていた。

◆

「もうっ！張？さんはまだですの！？せっかく指示を出してあげましたのに！」

袁紹が声を荒げる。それを煩わしそうに見ている二人が居る。

（指示をだすのが遅いですよ。それに・・・）

（のう、七乃。）

（はぁい、なんですか？美羽お嬢さま～。）

袁紹を小さくしたような少女と、その少女に付き従う女性だ。

袁術と張勲だ。二人は袁紹にばれないよう小さな声で話し合う。

（麗羽の作戦は無駄なんじゃろ？もう負けそうだから麗羽をおとりにして逃げんかえ？）

（そうですね～。戦場の兵は袁紹さんのせいで数が少ないですし、いったいいつ到着するか分かりませんからね～。）

（なら何時も通りでいこうかの。）

（ええ、孫策さんを殿にですね。）

「ちょっとそこ！なに話しているのですの！」

「なにも話しておらんぞ。なぁ七乃？」

「そうですよ～。きっと気のせいですよ。」

二人は袁紹の声に驚く事も無く嘘をつく。明らかに慣れている。

「のう、ちょっと花を摘みに行きたいのじゃが・・・」

「はぁ。はしたないですわよ、美羽さん。早くすませなさい。」

「あっお嬢さま、私もついていきます。」

「まったく・・・。一旦退いて戦況を立て直そうかしら？」

◆

「・・・・・妙ね。」

「何がですか、華琳さま？」

華琳が顔を顰めながら言う。それに稟が何故かと問う。

「いくら何でもここまで上手くいくものかしら・・・。」

「うまくいっているから逆にってやつじゃないのか？」

「いえ、違うわ。なにか仕出かしそうなのよ。」

それに疑問を持ってしまう。

「袁紹が仕出かすような人物と思えませんが。」

私の言葉に桂花が答えてくれる。

「そういえば烏涙は知らなかったわね。反董卓連合の時に空城があったのよ。当然なにがあるか分からないから皆その場で踏み止まっていたら、それを気にせず突入したのよ。」

「常識の斜め上を独走しているよなぁ。」

それはなんとまあ。動かないと状況が変わらないとはいえあまりにも考え無しだろう」

「仕出かすといえば幸い、前方に兵はあまり要らないでしょう。の事でしょうか？」

「一つあり得る事がありますね～。」

北郷を除き全員が想像がついたようだ。

「しかし華琳様、そんな事がありうるのですか？」

想像した事、それは誰だって発案しないもの。なぜなら自軍を省みらなすぎるからだ。

「麗羽ならありうるわ、それに来るのが遅すぎる。今す…」

「曹操さま！」

「ちっ・・・。何事か！」

「後方から砂煙！袁紹軍の模様！」

「数は！」

「二万を超えます！」

その数は想像を絶した。

「は、はぁ！？いくらなんでも多すぎるだろ！どんだけ遠回りしてきたんだ！」

「奏よ！彼女は失敗を人一倍嫌がるわ！何が何でも奇襲を成功させようとするはず！」

既に交戦状態にあるにも拘らず二万もの兵を率いて後ろを取る。正気の沙汰ではない。

「恐らく、進軍途中に見かけた兵は皆殺されているでしょうね～。」

「それよりも稟！追撃の為に温存させていた兵を出させなさい！」

「はっ！霞を向かわせます。」

「なら回して時間を稼げ！前方が終わり次第後方の援護に向かわせなさい！」

「了解しました！」

華琳はため息を一つ吐き、落ち着く。

「やられたわ・・・。被害は免れないでしょうね。」

「それにしても、二万と率いてここまで悟らせなかった張？さんの腕前は恐ろしいですね～。」

「奏は兵の扱いが上手いのよ。自分だけでなく、部下の失敗も嫌がるから的確に兵を動かすのよ。」

皆が話している中、私はそれどころではなかった。

（まずいわ、奏は降伏するの？このままじゃ奏が討ち取られてしまう。なんとしてもそれは避けなければならない！）

どうするか考え、一つだけアイデアが浮かぶ。しかし、華琳が受け入れるかが問題だ。

しかしなりふり構っていられない。私は華琳に進言する。

「華琳様、後方は時間稼ぎのみにとどまってくれませんか？」

全員が私を見る。

「なぜ？なにか考えがあるのでしょうね。」

「はい。恐らく袁紹は奏に指示を出した時、少数じゃあ地味だというだけで多くの兵を率いるよう命じたのでしょう。」

「十分にありえますね。」

「現在袁紹は立て直さなければならないほどの被害を受けています。そこに奏の奇襲が成功したと報告が入れば撤退するはずです。」

「たしかにそうね。でも、あなたが言いたいことはなんなの？」

「奏を・・・張？を仲間に引き入れませんか？」

「烏涙、アンタ何言ってるの？奏の戦力は魅力的だけどアイツの頭の硬さアンタもわかっているでしょ。」

「だけどなにより武に誇りを持ち、功績を得ることや強者と戦う事が喜びでもあるのよ。」

私と桂花が言いあっている所に北郷の声が入る。

「えっと・・・、つまり張？に袁紹が攻めずに撤退するところを見せ、失望させようと言う事か？」

「それだけじゃあ無いわ。私達が言い合っている事は、奏が袁紹を逃がす為に降伏しないかもしれないということよ。」

「二人の話を聞くとどっちもありうると思えますね～。」

このままでは平行線のままだ。埒を明けようと華琳に頼む。

「華琳様、一つ望みを叶えると約束してくださいましたよね。お願いします、私の案を聞き入れてください。」

無視されたことに腹を立てたのだろう。桂花が無視するなと怒鳴ってきた。

大体の違いはあるものの史実との乖離は男が女になっていることぐらいか。しかしだからと言ってこれから先も乖離しないとは言い切れない。

この世界が史実に忠実とは言えないかもしれないからだ。

華琳が口を開く。

「言ったわよ、叶えられる範囲までと。」

望みは薄そうだ。しかしこれで退くわけにはいかない。

「ええ、私はこれが叶えられる範囲と思いました。」

それに、と言って付け加える。

「奏ほど美人を引き入れないのはもったいないと思いませんか？」

静寂に包まれる。しかし、それを華琳の笑い声が吹き飛ばした。

「ふふふ。烏涙、あなた急ぎすぎる癖があるわね。それは治しておきなさい。」

「はい？」

華琳に言われた事が理解できなかった。

「ねえ、私は一度も張？を討ち取れと支持は出してないわよ。」

「え？華琳それってどういう・・・」

「簡単な話よ。私は最初から張？を引き入れるつもりだったけど、なにを勘違いしたのか烏涙は討ち取られると思ったのよ。」

私は唖然としながら笑い続ける華琳を見ることしか出来ない。

「で、では華琳さま。それでは・・・」

「ええ、張？をなんとしてても引き入れなさい。せっかくだから烏涙の策を使ってね。」

恥ずかしさのあまり、俯いてしまった。多分自分の顔は赤いだろう。

◆

「前進、前進ー！敵軍の背後は目の前だ！」

軍が砂煙を上げ、荒野を駆ける。

その人の雪崩の先頭に一際目立つ存在がいる。

奏だ。彼女がこの馬鹿げた作戦を成功目前まで導いたのだ。

しかし彼女は疑問を抱いている。

（この作戦は成功するのか？ここまでこれたのは正直、奇跡と言っても差し支えない。）

「張？さま！敵軍が展開し始めました！」

（展開しただと？まさか温存していたと言うのか。それに背後には既に兵がいた、まるでこちらの動きが知られているように・・・。）

「ええい、ままよ！勢いを緩めるな！このまま蹴散らすぞ！」

金の雪崩はさらに勢いを増し、全てを飲み込まんとする。

それに対するは真逆、楯と槍を構え雪崩を止めんとする青の壁。あの勢いを前にしても兵達は微動だにしない。

「張遼さま、迎撃準備完了いたしました。」

「ご苦労さん。ん～、先頭に何かおるなぁ。アイツが張？かいな？」

さて、と霞は一息つき息を吸う。

「ええかアンタら！どっしり構えとき！時間を稼いで袁紹が撤退する姿をあいつらに見せるんや！」

「敵軍、眼前まで来ました！」

「おう！全軍、迎撃ーーー！」

両軍が激突する。

進む事を止められずに曹操軍の構える槍に串刺しになる者、袁紹軍の勢いを止められず撥ねられる者。

その混沌とした中、異彩を放つ二人がいる。

「あんたが張？やな？」

「そう言う貴様は？」

互いに一旦退き、名乗りを上げる。

「おお、すまんな。ウチの名は張遼、字は文遠や。」

「そうか、貴様が・・・相手に不足無し。我が名は張？、字は儁乂。行くぞ！」

「来い！」

両者が再び激突する。金属音が響く。

奏は片手の爪で偃月刀を抑えつつ、もう片手の爪で霞を引き裂こうとする。

だが霞はそれを許さない。偃月刀を回転させ弾く。

互いに譲らない攻防。その動きは早すぎてもはや常人では理解す

る事は無理だろう。

急に霞は語り出す。

「すごいなアンタ！こんな無茶な作戦を成功させようとする上、ここまで強いときたもんや！」

「ふっ、その言葉は純粋に嬉しい。だがここで手間取るわけにはいかん。本軍とあわせて貴様らを挟み撃ちにしてやろう！」

「それは叶わんかもな。」

「ふん、ほざけ。」

そして二人が動き出すその直前、奏の下に兵士が来る。

「貴様！邪魔をするな！」

「お待ちください！本隊が、袁紹さま達が撤退を始めました！」

その情報は信じられないものだった。霞と打ち合うことも忘れ兵に問い詰める。

「どう言う事だ！なぜ本隊が攻めに転じん！」

「わ、分かりません！ただ本隊は我々の動きに合わせ撤退を始めた模様です。」

奏は理解が出来ない。撤退した？なら私達のこの作戦はなんの意味があったというのだ。混乱に陥る奏に霞が話しかける。

「張？、アンタ降伏しい。袁紹の所なんかにいても良いことあらへんで。それに比べて、華琳の所はけっこーおもろいで。」

霞の言葉に奏は少し冷静さを取り戻し、脳裏に一人の人物がよぎる。

（本来ならアイツに負ける事は気に食わない、本来ならだ。しかし、何も成し遂げぬまま朽ち果てる事など耐え切れぬ。）

奏は決心した。勝負に負け、先を取ることにしたのだ。

「全軍、止め！止めーー！」

奏の号令で袁紹軍の動きが止まる。

「本隊は我々の努力を無碍にし、撤退した！もはやついてはいけぬ！我々は曹操軍に投降する！繰り返す！」

官渡の戦いは終わりを告げた。

十三、　官渡と投降（後書き）

急に投降が途絶えて申し訳ありません。
理由は諸事情と筆がなかなか進まない事です。
別に書くことが嫌になっているわけではありません。
二次創作を放置するわけではありませんが、前のように毎日投降は難しいと思います。
ひとまずはオリ展開に入るまでがんばります。

十四、　天才と地図

現在は夜中。人の気配がしない場所で二人が向かい合っている。

「なぜ私が投降してすぐ話さなかったのか？」

「忙しかったのよ。すぐに話す時間なんて無かったわ。」

その二人は私と奏。

奏は先日の戦いで華琳の下へと下った。

「勝負は私の勝ちだけど？」

「ああ。駄々をこねるような真似はせん。私の負けだ。だが・・・」

「だが？」

「約束は守ってもらうぞ。大陸を統一した国を落す・・・その美酒を味わってみたいからな。」

そういって奏は笑う。その笑みは異性が見たら虜になるだろう。

「ええ、当然よ。その時までは華琳様に従っておきなさい。」

いろいろハプニングがあったがなんとか奏を配下に加えられた。

これからはもう少し慎重にいかなければ・・・

そう思ったところであくびが邪魔をする。

「眠たいわね・・・。あなたももう寝なさい、いつ華琳様から連絡がくるのか分からないのだから。」

私達がしている事は魏の周囲の国境を沿い、警戒をすること。

私達と言うのは私と奏の二人ではない。一応狗もいるのだが軍師ではなく私の部下なので数に入ってはいない。

春蘭や秋蘭、三人娘など魏の主力はほとんど私と同じような任務を受けている。

当然、華琳の下は手薄になるのだから危険だがそれが策。

明確な敵意を持っている国を釣る為の策だ。

「しかし、ここまで遠い場所に来て大丈夫か？伝令がきたので戻ると国が無かったなんて笑えんぞ。」

「あなたの例えも笑えないわよ。確かに釣るのが目的だけど、誰も君主からあまり離れていなかったら相手に悟られるわよ。それに、ここまで離れているのは私達ぐらいよ。たとえ危機に陥っても春蘭達が何とかするでしょ。」

「妙に軽いな。もっと危機感は懐けんのか？」

「懐かないわよ。こんなところで華琳様が朽ちるなんて、絶対にありえないから。」

私の言葉に奏は納得できないようだ。顔を顰めるがそれ以上は聞かなかった。

「早く寝ましょ。戻らないと狗が慌てるわ。」

「ああ、わかった。」

話は終わり、寝床に行くが狗がなにやら慌てている。

「烏涙さま！大変です！」

「なにがあった！」

「曹操さまの所に劉備軍が攻めました！戦力差は圧倒的！」

「わかったわ。すぐに皆を起こし華琳様の下へ急ぐぞ！」

「了解であります！」「了解！」

◆

「で、急いだら既に戦いは終わっていたと。」

「・・・誠に申し訳ございません。」

休まずに急いで戻ったもの、劉備軍はもう居なかった。

「別に良いわよ、遠くに行くよう命じたのは私なのだから・・・。それよりも奏は大丈夫なの？」

「・・・・・・すぅ。」

「はぁ、どうも一度寝ている時馬から落ちたらしく、それきり起きていたようです。」

また落ちて部下に失態を見せたくないという一心でずっと起きていたらしい。

だが城に着いて緊張の糸が切れたのか、立ったまま寝始めた。

本当に奏を引き込んでよかったのかと考えてしまう。

「奏は部屋に連れて行ってあげなさい。あなた達は今日はもう休んでいいわよ。」

「御意、では。」

華琳はまだ仕事があるのだろう、私に背を向け歩き出した。

「そこの、奏を部屋まで連れて行ってあげて。」

「はっ！」

奏は近くにいた兵に任せた後、思考に浸る。

（現在の魏の有力な将は私含めて十四人。そのうち私側は三人、狗含めたら四人・・・いやまだ三人か。命はまだこっち側では無いのよね。）

命は説得せねば・・・なんとしてもこちら側に引き込みたい。

考える事は将の事だけではない。

（赤壁はどうするか・・・火計を止めれば魏の勝利。そしてそのまま呉に止めを、その後に蜀へ侵攻。この流れなら魏が大陸統一するわね。）

そして頂点に君臨した華琳の首を取る。これで私の夢は叶う・・・だがそのための自分側の将が少なすぎる。

現時点で華琳側は十一人、こちらは命込みで四人。圧倒的に不利だ。

（赤壁時には黄蓋と鳳統が魏に来る。その時にこちらへ引き込む隙が出来るはず。）

二人の引き込みは華琳を討った後、呉と蜀の復興を約束すれば引き込めるか？上手くいっても合計六人で華琳側の半分。

（少ないわね。兵は何とかなるものの、それを率いる将が少なければ意味が無い・・・早く華琳側に属していない将を探さないと。）

有名どころは既に探した。しかし曹仁や徐晃が見つからないとは思いもしなかった。もしもいたしても曹仁は引き込めないだろうが。

気づいたら既に自分の部屋の前についていた。

考え事は一旦止め寝ようかとドアを開けたら・・・

「くそっ、なぜ司馬懿はこの私を求めんのだ。犬や・・・よりにもよって?艾だと?そいつらよりもこの私が優れていると言うのに・・・」

なにやら少女がいた。ひたすら愚痴を言っている処か、一応魏の上層部である私を呼び捨てにしている。

いきなりな事に対して唖然としていると女性がこちらに気づいた。

「お戻りでしたか、司馬懿殿。お疲れの所申し訳ございませんがお話が。」

白々しい。私を呼び捨てにしていた癖に気づいていないと思っているのか。

この薄い金髪と見るもの全てを見下すような目が特徴の少女、先ほどの発言からして一つだけ心当たりがある。

(この自信や若さ、そして?艾を敵視している人物・・・ありえる。鎌をかけてみましょう。)

「無断で私の部屋に入る上に先ほどの無礼、あの鍾会でないなら罰すわよ。」

鍾会。史実ではかなりの若さで頭角をあらわすが、性格に難あり。その上、?艾を手柄を取られたからという理由で殺す。

あまりにも使いづらいため放って置いたが・・・

「と言うことなら私は罰せられないのだな。この私が天才である

鍾会だ。」

無礼を働いても罰せられないと分かった瞬間にため口に変わった。

この態度、本来なら怒りが溜まるが・・・外見のせいか背伸びをしてる少女にしか見えない。

「そう。で、天才とやらは何しに私の部屋に来たの？」

「一言申しに来たのだ。司馬懿、なぜ犬を配下にし、？艾を探す！なぜ天才であるこの私を探そうとしない！」

いい始めたら止まらない。尾を振るしか出来ないヤツとは違うだの？艾と違い英才教育を受けているだの言っている。

「言いたいことは分かったわ。自分を売りたいなら華琳の所に行けばいいじゃない。」

「既に行った。だが曹操はこの私に向かって『英才教育？ふっ。』と鼻で笑ったのだ！それにあの百合百合しい空気はこの私にふさわしくない！」

何とも言えない、と言うかアホらしい。

「そして今度はお前が？艾を探している所を見つけた！さらにその後は犬を部下に加えた！」

とりあえず私は茶を入れ、机に置いた。ずっと立ち話は辛い。鍾会は座って茶を飲み一息ついたところで再び語り始めた。

「ありえない！なぜこの私を探さない！まあお前は有能な人物を集めようとしているからいずれ・・・」

「いずれ誘いが来るからと待っていたが何時まで待っても来ず、こうして私のも下に来たと。」

「う、うむ。その通りだ。」

さて、どうしようか。話によると鍾会は？艾を知っているらしい。？艾はどこだ？と聞いても答えてはくれないだろう。

ここは鍾会を引き込むか？扱いづらそうに見えて単純だがらそこまでは苦労しないかも・・・

いや、あまり文句は言えない。有能な人物が増えるのは喜ぶべきだ。

おだてておけば文句は言うまい。

「すまないわね、あなたほどの天才が本当にいるとは嘘と思っていたわ。だって話に聞く限りかなりの有能さ、まさかそんな人物がいるとは考えないでしょ？」

「そ、そうか・・・ふふふ。実際にいるとは思わないほどの天才か・・・。」

なにやら嬉しそうだ。自分で天才と言っているが、他の人から天才といわれるのが好きらしい。

「ちょうどいいわ。かなりいい話があるのだけど・・・聞く？」

「うむ、聞くとも！この天才に話すがいい！」

「じゃあ誰もいない場所で話しましょ。あなた以外に聞かせたくは無いからね。」

◆

「と、言う事よ。そうすればあなたは大陸一の天才として歴史に名を刻むでしょうね。」

鍾会に私の夢とこちら側につくことで発生するメリットを話し終えた。その鍾会の様子はというと・・・

「すばらしい、すばらしいぞ！この私の名が広まるだけでなく、気に食わない曹操を討つ事も出来る！受けるぞ、その話！」

好評のようだ。これで鍾会はこちら側についたも当然。あとは・・・

「ありがとう、あなたが味方につくなら怖いもの無しね。・・・そういえば？艾を知っているのよね？かなり探したのだけど見つからなかったわよ？」

そう、？艾の事だ。あれほど探したのに見つからなかったというのに、なぜか鍾会は知っている。

「ああ、その事？それはこの私が？艾の事を広めないようしていたぞ。」

「どう言う事？まさか気に食わないからと言う理由で？」

「うむ・・・な、何だっ！悪いかっ！」

思わずため息が出る。それだけの理由でそこまでの動きをする・・・すごい事だが方向を間違っている。

「明日でいいからすぐに？艾を呼んで。一人でも人数を増やさないといけない事、あなたなら分かるでしょ？」

「分かった・・・明日だな・・・。」

かなり不満そうだ。約束を破る事はしないだろうが機嫌をとっておこう。

「お願いね。頼りにしてるわよ、大陸一の天才。」

「天才・・・ふふふ、司馬懿も芝居がすぎる。」

その瞬間、鳥肌がたった。寒い、寒すぎる。

なぜこのタイミングで洒落を？なぜ私の名前で？

「司馬懿と芝居、我ながら恐ろしい。ふふふ・・・。」

満足そうに笑う鍾会に対し、私はずっと固まっていた。

◆

室内にカツカツと靴の音が響く。

原因は狗、先ほどから顔を顰めながら左から右へ、右から左へと行ったり来たりを繰り返している。

「狗、少し落ち着きなさい。」

「も、申し訳ございません！しかしその鍾会という者、いくらなんでも遅すぎやしませんか？」

「いいのよ。私は明日連れて来いと言っただけで、時間まで指定しては無かったからね。」

「いくらなんでも常識というものがあります！今はもう夕焼け、昼前かその後、遅れるならば連絡を遣すのが普通です！」

ぷんすか怒る狗の言うとおり鍾会はまだ来ていない。

まさか約束を破ったのか？でも昨日は不服そうながらも返事はした。？艾を連れて来てくれるとは思うが・・・

急にノックの音が響く。

狗は即座に私の傍に移動し、姿勢を正す。それを確認し、

「入って良いわよ。」

入ってよいと許可を出す。ドアを開き顔を出したのは鍾会だった。

「司馬懿、来たぞ。」

「貴様、遅すぎるぞ！その上烏涙さまを呼び捨てにするとは、破廉恥極まりない！」

「何だ？この私に向かって・・・なんだ犬か。キャンキャン喚くな、この私は無礼は許可されている。」

その言葉に衝撃を受けたようで狗は私に問いかける。

「本当でございますか、烏涙さま？」

「本当よ、下手に取り繕われるよりかマシと言う事よ。このことに関しては目をつぶってくれない？」

「了解であります・・・」

一応狗は返事はしてくれたものの、すぐに鍾会をにらみつける。

鍾会もにらみ返し、悪い空気がさらに悪くなるがそこに声が入る。

「あの・・・私は・・・」

「む。司馬懿、こいつが？艾だ。」

「は、はじめまして。？艾と申します。」

「はじめまして、私が司馬懿よ。そして・・・」

「私めは諸葛誕であります！」

さて、目の前にいる探していた?艾という人物シスター服・・・のような物だと思われる。頭には腰の辺りまで届くベールをつけている為、多分あっているはず。

そして鍾会と違い濃い金髪に碧眼、この世界は武の強さで美も決まるのか?それに対し軍師は・・・いや稟がいる。軍師は全員小さいと決まったわけじゃない。

「じゃあ早速だけど、あなた地理に詳しく武も文句なしと聞くのだけど。そこはどうなのかしら?」

「武の腕前は自分でも分かりませんが、地理なら自信があります。」

「そう。狗、アレを。」

狗が出したのは地図と碁石、それを机に用意させる。

用意された地図に碁石を並べたら問題の完成だ。

「この地図上に置かれた黒い碁石が敵軍、白色は自軍よ。この場合どう動けばいいかしら?」

用意した地図は山の地図。入り組み、複雑な地形を表すこの地図で軍をどう動かすか考えるならば、たとえ桂花レベルの軍師でもかなりの時間を用いる。

この問題は昨日、狗と協力し作り上げた問題だ。さて、?士載はどうくるのか。

?.艾は真剣に地図を見る。少しも見落としが無いように隅々まで。

「わかったぞ、この私には。まあ英才教育を受けているこの私に隙が無いのは当然だが。」

おっ、鍾会は自信がありそうだ。

「これはだな・・・」

「鍾会殿！これは？艾殿の問題です！あなたの出る幕は・・・」

「いいわ、聞かせて。」

「烏涙さま～。」

狗は涙目でこちらに向き、鍾会は勝ち誇ったような笑みを狗に向ける。

あっちを立てればこっちが立たず。早めに対策を考えておこう、狗が尾をたれ下げている姿が原子できる。

「さすが司馬懿、わかっているな。この配置は敵軍は頂に、自軍は麓になっている。こちら側が不利なのは阿呆でも分かる事。ならばなんらかの作戦が必要だ。」

鍾会の言うとおり誰にでも不利なのは判断が出来る。大事なのはここからだ。

「作戦はこうだ。ここの辺りは斜面が緩やか、対等に戦える。さらにここまでに移動する間は敵軍に察知されにくい地形。麓のほう

で陽動を仕掛け、別働隊に背後を攻撃させる。」

鍾会は小さい胸を張りながら誇らしく笑む。

しかしその反応を嬉しそうに狗が見る。

普通ならこの答えは正解を出してもよい。

策は基本二・三人で策を出し合い、最もベストだと思われる策を採用する。

複雑な地形を短時間で読み取り、作戦まで用意した。

だけどそれじゃあ私は満足できない。

鍾会はもしもの時を考えてはいない。いや、悪いわけではない。彼女は・・・この世界ではまだだが武将、本来軍師に任せる策を自ら考え出した。時々発言する英才教育の賜物だろう。

でも桂花や風達のレベルまでは達してはいない。やはり彼女は武将よりなのだろう。

まあこれは地理に精通しているとされる?艾専用の問題。最初から鍾会に丸をつけるつもりは無い。

無礼を許す代わりのささやかな仕返しだ。

機嫌よさそうに笑う鍾会を眺めていると?艾が手を上げる。

「よろしいですか?」

「できたの？ならどうするか教えて頂戴。」

「はい、先ほどの鍾会さんの作戦ですが・・・」

「なんだ？この私の作戦にけちをつけるか。」

鍾会の機嫌が先ほどと変わり一気に悪くなる。

「鍾会、まずは聞きましょ。その後に反論すればいいじゃない。」

「く・・・？艾！早く論破してみろ。できるならな。」

「では続きです。先ほどの作戦で出た緩やかな道ですが、それは敵軍も知っているはず。」

？艾の言葉に鍾会は少し反応する。表情を見るにそのことを失念していたのだろう、苦虫を噛んだような表情になる。

「相手が配置されているのは山頂、食料などを支給する部隊の通る道も自然と限られます。」

「緩やかな道、と言うことでありますな？」

「そうです。そのため、このあたりで待ち伏せしていれば兵糧攻めは簡単でしょう。」

「待て、先ほどお前はこの道は敵も知っているはずと言ったな？なら支給を邪魔される事も考えられるはずだぞ。」

「ですからそれを見据え伏兵を用意するはずです、この敵軍から確認できない道に。ここの地形は入り組んでいるがために、伏兵をしのばせるのは容易です。」

「なるほど、存在が分かる伏兵をたたくのは簡単。安心して兵糧攻めができ、弱った敵軍に止めを刺すのね。」

これはいい。被害が少なくなるよう考えられており、敵軍からの視点でも見ている。

この作戦を五分もせず考え出すのだ。あとは武のほうだが・・・

「いえ、敵軍が動くのを待ちます。」

予想だにしなかった答えが出た。おもわず目を丸くする。

「どういうことでありますか？敵軍が疲弊しているとはいえ、この地形で相手から攻められた場合、被害は大きくなりますぞ。」

「いえ、相手が撤退するのを待ちます。それにこちらから攻めた場合、もしもの時は壊滅してしまいます。」

「そのもしもって？」

「火計です。」

「どういうことだ？いったい何処に火を放つと言うのだ。」

いや、敵軍が自身の拠点に放つ方法もある。しかし壊滅とまではいかない筈だ。

「山の急な斜面に放ちます。火矢で適当に下あたりを燃やし、拠点を燃やせば・・・」

艾は碁石を並べなおした後、両手でコの形にし自軍を囲む。

「このように我が軍は炎と敵軍に囲まれます。」

「攻めていたら火に焼かれ、撤退すれば背後を討たれる・・・最悪の場合こうなると言うことね？」

「はい、そうなります。」

「何と・・・！」

私も狗も驚かざるおえない。

しかし？艾の話はこれで終わりではない。

支給を出している拠点の場所などを割り出していく。

策に関しては荒削りな部分はあるが、この地理の知識と軍師の知恵が合わされば・・・

「鍾会、？艾はどの位強いの？」

「夏侯惇将軍と打ち合えるとは思う・・・認めなく無いがな」

「そう・・・ふふふ。」

「烏涙さま？」

「？艾、直ぐに武将にしてあげる。もし、叶えたいことがあるなら協力してあげる。ただその代わり、私にも協力してほしいのだけど。」

「ほ、本当ですか？なら一つお願いが有るのですが。」

「構わないわ、いってごらんなさい。」

？艾に協力する代わりに、彼女をこちら側へ引き込む。なんてお得なんだろう。

どんどん私の配下が増えていくことに思わずテンションがあがる。

フハハハハと笑ってみるか？

浮かれている私に？艾が言った事は、

「私、御使い様とお話をしたいのです・・・」

Ｏｈ・・・。可愛く頬を赤く染めちゃって。

正直嫌な予感しかしない。

十四、　天才と地図（後書き）

はやくオリ路線に乗りたいです。最初は毎日投降できるほど文章が頭に浮かんだ時が懐かしい。
すこしずつノリ始めたから投降速度は上がるかもしれません。

あと、この頃誤字報告がまったく無いのですが今の所誤字はまったく無いと言う事でいいのですかね？
もし見つけたならば報告をお願いします。自分で合っていると思っていても間違いかもしれません。少しつづでも文章を良くしたいので。
勿論、キャラがぶれている等の批判もあるならお願いします。

十五、　いざこざと試合

「おぉ、うまい！命って料理が上手いんだな。」

今日の昼飯は珍しく命が作ってくれた。残念ながら時間が合わず、俺と春蘭と秋蘭の三人しか揃わなかった。一応後から華琳が来るが。

「えへへ。でも流琉には負けるけどね。」

「比べる相手が悪いだけだ、十分に美味い。しかし・・・」

「肉が足らんな。」

春蘭が言うとおり命の料理にはどれも肉が少ないどころか無い。さまざまな種類があるが全部野菜がメインの料理だ。美味いから俺は気にしないが。

「僕はお肉よりも野菜が好きなんだけど、気づいたら作れる料理も野菜をたっぷり使ったものばっかりになちゃったんだ。」

「まあ健康にはよさそうだな。」

「いや、料理には肉がないと始まらん。命は肉を食え肉を、そんなのでは体が弱いままだぞ。」

「春蘭は肉を食いたいだけだろ。」

「ああ、そうだが？」

「あはは。それなら今度、お肉を使った料理を練習しようかな。」

「そん時はまた呼んでくれよ。」

「わはぁひもわふえゆひゃよ！」

「姉者、まずは飲み込んでから話せ。」

そうやって四人で話しながら食べてると不意に声をかけられる。

「北郷、いるかしら？」

「あっ烏涙ちゃん。一刀ならここにいるよ。」

声をかけてきたのは烏涙だった。華琳が来たかと勝手に勘違いした春蘭がなんだ、烏涙かとつぶやいていた。

「ありがと、命。北郷、あなたに会いたいって人がいるのだけど・・・後にしたほうがいいかしら？」

「ん？別に大丈夫だけど。」

俺に会いたい？いったいどんな人物やら・・・

「そう。？艾、あの男が天の御使いよ。」

？艾？？艾っていうと蜀への侵攻の？艾か？

そう考えていると現れたのはシスター。なぜにシスター？さすがに文化が違いすぎるんじゃあ。

「あなたが・・・御使い様ですね？」

「あ、ああ。そうだけど・・・」

自分が天の御使いと認めたらシスターは急に俺の両手を握る。

「ずっと・・・ずっとお会いしたかったです、御使い様！私は？艾、字を士載と申します。どうか私のことは聖と、真名でお呼びください！」

え～と、この娘の表情はどこかで見たことあるぞ。・・・あぁ桂花だ、桂花が華琳を見ている表情に似ている。

俺はこの唐突な事態に対してはなく、後ろからひしひしと感じる春蘭のものらしき殺気に対して現実逃避をしていた。

◆

最近気づいたのだが、魏の大半の将の北郷に対する態度が変わってきている。

たとえば、例の三人娘は北郷と街に出かけているのを見たとき。

以前はただじゃれているように見えたが、この頃は真桜と沙和が積極的にくっ付いて北郷が歩きづらそうにしていた。凪は珍しく二人を注意する処か、羨ましそうに見ていた。何度か北郷の服の端を掴もうとしてやっぱりやめる、何てことも見た。

春蘭と秋蘭の場合はたまに北郷と一緒に酒を飲んでいるようだ。

こちらは詳しく知らないが、よく春蘭の「ほんごぉ～～～！」という呂律の回っていない声が聞こえてくる。

以外だったのが奏だ。書庫で本を読んでる際に奏が北郷に文字を教えているのを見かけたが、奏が北郷に頼りになるだとか分かりやすいと褒められて笑顔を向けられるたびに、表情こそいつも通りの済ましたような顔だがこっそりとガッツポーズをしていた。

最も最近で、なおかつ驚いたのは華琳だ。春蘭を始めとした将たちに見せ付けるように北郷とディープなキスをした後、見ていた私達に北郷とそういう行為をした場合報告しろなどと言ってきた。

とまあこの様に北郷は魏でハーレムを構築しつつある。

皆が北郷にラヴな時に現れた北郷に光悦とした表情を向ける謎の女性。

命はまだ恋愛感情を持ってはいないのだろう、ただびっくりしている。

秋蘭は呆れているようだ。大方またかなんて考えているのだろう。

春蘭は北郷へ殺気を向けている。春蘭は良くも悪くも何事に対してもまっすぐだ。いきなり現れた女性が北郷に近づくのがつまらないようだ。そして・・・

「北郷ぉーー！貴様、性懲りも無く女をたらしおって！」

「うおっ！まっ待て春蘭！まずは落ち着け、俺と彼女は今始めて会ったんだ！」

そのとばっちりは全て北郷へと向かう。もはや見慣れた光景だ。

「言い訳は見苦しいぞ！」

「ちょっ！」

春蘭はいつもどおり北郷へ、愛情の裏返しである拳を振りかぶる。

しかし今回はそれを邪魔するものが現れた。

「なんのつもりだ、貴様。」

「それはこちらの台詞です。なぜ御使い様に手を上げるのですか？」

「そ、それは・・・北郷だ！全て北郷が悪いのだ！」

「おい！さすがに酷すぎるぞ！」

はぁ、まさかこんな展開になるなんて。二人は私達どころか、北郷すら置いて話を進める。

「それに気に食わんのなら力で示せばよかろう。貴様、なかなかのやり手だろう？」

「そうですか・・・ならば受けて立ちましょう。御使い様、少しお待ちください。私がこの不届き者に天誅を下しますから。」

「え？いや俺は別に・・・」

「ほう、この私に天誅とは面白い。せいぜい吠え面を拝ませぬことだな。」

「おーい春蘭、聞いてる？」

北郷の言葉にはまったく聴く耳を持たず、二人はそのまま外へ。

そういえば鍾会に？艾の強さを聞いたけど、やっぱりこの目で見たいわね。百聞は一見にしかずなんて言うし。

「私は面白そうだから見に行くけど、あなた達はどうする？」

「私も姉者の下へ行きたいのだがな、華琳さまが・・・」

「秋蘭さん、僕がここで華琳さまを待っておくから大丈夫だよ。」

「そうか。すまんな、命。」

「北郷も一緒に行くわよ。種馬としての責任を取らないと。」

「烏涙までそう言うか・・・」

ハーレムを築いておいて今更なにを。

◆

「覚悟はいいな？」

「ええ、何時でもどうぞ。」

広めの庭に互いが武器を構える。静寂が辺りを包・・・みはしていなかった。

原因は？艾の手元、武器にある。先ほどからブォンブォンと唸りを上げている。

「ちょっと待て！」

「なんだ北郷、水を差すというならお前から斬るぞ。」

「そんなつもりは無い、というか？艾さんの持つそれは何だよ！」

「これですか？これは鎖鋸と言います。それと私の事は聖とお呼びください。呼び捨てでかまいません、御使いさまには真名で呼んで欲しいのです。」

「あ、ああ。分かったよ聖。」

鎖鋸。いわゆるチェーンソーの事だ。しかしただのチェーンソーではない、サイズがおかしい。

あえて人で例えるが、普通のチェーンソーのサイズなら一度に切れるのは一人が限界だ。

だが？艾の持つそれは一度で二・三人は切れそうなほどでかい。

「そういえば、真桜の持つ武器と何処と無く似ているな。」

「ああ、すっかり忘れていたけど螺旋槍も十分おかしいわね。」

ドリルといい、チェーンソーといい。この世界の技術力は異常すぎる。いや、今更か。

「もういいな、いいだろう。我は夏侯元譲！魏武の大剣なり！」

「私は？士載、御使いさまを守る為に参ります！」

「こい！」

春蘭の声と同時に？艾の鎖鉈の唸り声が大きくなる。

「はぁ！」

掛け声と共に？艾が腕を振り下ろす。それを春蘭は難なく大剣で受け止める。

「くっ、てぇい！」

春蘭は蹴りを放つ。しかし？艾はバックステップでかわし距離をとる。

「次はこちらから行くぞ！」

？艾は切上げで迎撃するが受け流される。そして切り払おうとする春蘭の姿が目の前に。

「やらせません！」

「何っ！」

春蘭の目が驚愕に染まる。当ると思った一撃を防がれたのだ。

激しく斬りあうも互いに一撃を決めれない、決めさせない。

「これが？艾の武・・・」

？艾はあの春蘭と互角に戦っている。あの力をこちら側に引き込めば・・・

私の目は？艾を捕らえて離さない。が、隣からの声であっさりと視界から外してしまう。

「この喧しい音。やはり？艾だったか。」

「鍾会、あなたいつ来てたの？」

「ちょうど今だ。ところでそこの男が天の御使いとやらか？」

「俺？まあそうだけど。」

「ふむ・・・。」

鍾会じっくりと上から下へ、下から上へと北郷と見る。

「な、なんだ？」

「思ったより普通だな。変わっていることは服ぐらいか。・・・！　御使いの正体は秘密かい？」

「・・・・・・・え？」

「ふふふ、完璧だ。」

急激に下がる温度、反応が取れていない北郷の顔、決まったと思ってる鍾会。

白けている空間の隣には激戦がある、なんともシュールだ。

「烏涙さん。この場合はどうすればいいんでしょうか？」

「耐えるのよ。後、おだててておけば何とかなるわ。」

微妙な表情をする北郷。自分の名前で洒落を言われた私よりはマシだろう。

「で、なぜ来たの？あなた、？艾を嫌っているようだけど。」

「嫌っている？当たり前だ。この私よりも背が高いのが気に食わん、胸がでかいのが気に食わん、髪の色が濃いのも気に食わん。そして何よりもこの私より武が優れている事が気に食わん！」

本当に？艾の事が嫌いなのね。というか髪の色、コンプレックスなんだ。もしかしてそこを含めて華琳を怨んでる？

「それじゃあ対抗策を見つける為に来たの？」

「そうだ。しかし毎回アイツの戦いを見ているが・・・私が？艾を超えるのはまだ時間が掛かる。」

・・・ふーん。言動や態度で勘違いしてたけど、きちんと自分を見定める事が出来るのね。鍾会の認識を改めておかないと。

「毎回見てるって事なら結構努力してるんだろ？なら必ず超えれると思うぞ。」

「当然だ、この私は英才教育を受けたのだ。艾なぞすぐに超えてみせる。合ったばかりとはいえ、この私のことを分かってるではないか、気に入ったぞ。鍾会、字は士季。この私の名だ、頭に刻んでおけ。」

「はは、しっかりと覚えとくよ。俺は姓が北郷で名が一刀、字と真名は無いんだ。よろしく。」

北郷と鍾会が握手を交わす。

割とすぐに仲良くなったわね・・・意外と鍾会は人懐こいのか、北郷の人を惹きつける種馬的魅力のどちらかしら？いや、どちらもでしょうね。

そういえば秋蘭は・・・いた。どうやら熱心に二人の対決を見ている。話に入ってこなかったので気づかなかった。

「どうしたの、姉が心配なのかしら？」

「む、烏滸か。いや、姉者は強い。心配なぞするだけ無駄だ。私が気になるのは？艾の事だ。」

「？艾の事？」

「ああ。あいつは姉者と打ち合っているほどの腕だ。それだけの武を持つと言うのに、今まで名前を聞いた事は無かったぞ。」

「たしかにねぇ。あれを見せられたらとても文官なんて思えないわよね。」

「文官？それは冗談では。」

「本当よ。地理が得意だからそれを活用するために文官になったらしいわ。」

秋蘭は信じられないとばかりにため息を吐く。

「どうみても武官向きだろう。ま、素直に喜ぶべきだな。」

「そうね。早速華琳に合わせて武将にしてもらいましょう。」

「秋蘭さーん、連れてきましたよー！」

「すごい音ね。どんな戦い方をしているのかしら？」

「話をすれば、だな。」

「命、春蘭の相手をしているのが？艾なのよね？」

「はい、そうですよ。」

「気に入ったの？」

「当たり前じゃない。春蘭と対等に戦う強さ、あの服でなかなか

見えないけど色白な肌。そそられるじゃない。」

「色白なら僕も負けてませんよー。」

「・・・・・命は通り過ぎて若干青いのよ。がんばって健康になりなさい。」

その日は来るのだろうか？・・・考えられないわね、命には悪いけど。

「あの、華琳さま。その？艾の事ですが・・・夜を共にするのは無理かと。」

「？　どういうこと秋蘭。」

北郷にぞっこんだからね。本当にどうやって引き込もう。

訊ねられた秋蘭は北郷の方へ向く。北郷を見て納得したらしく華琳は顔を引きつらせる。ん？北郷は鍾会と仲が良さそうに・・・あ～あ。

「烏涙、あの者は？」

「気づかなかったのね。さっき来たらしいのだけど。」

華琳は北郷を睨み付け、北郷がそれに気づき顔を青くする。そして鍾会が話している相手の向く先を見る。そしたら次は華琳と鍾会の睨み合いが始まった。

想像通りの仲の悪さね。鍾会は馬鹿にされて、華琳は気に食わな

いヤツが北郷と一緒にいる。

・・・鍾会を将として迎え入れられる、よね？不安だわ。

「！　決まったぞ！」

秋蘭の声を聞き、直ぐに勝負の結果を見る。春蘭が剣を？艾の首下に当てている。

うっかりしたわ、話してたり考え事で試合を見逃すなんて。

「ふふん。なかなか腕が立つが、私には敵わなかった様だな。」

「くっ、無念・・・です。」

勝者は春蘭。華琳は彼女に労いの言葉をかける。

「よくやったわ、春蘭。途中からしか見てなかったけど、素晴らしい戦いだったわよ。」

「かかっ華琳さま！はい、魏武の大剣に、それも華琳さまの御前で負けなど許されません！」

「ふふっ、春蘭には後でご褒美をあげましょう。それとあなた。」

「はい。何でございましょうか、曹操さま。」

？艾は少し驚く素振りを見せるも、丁寧に言葉を返す。

「まず名を教えなさい。」

「分かりました。私は?艾、字を士載と申します。」

「そう。では?艾、あなたの力を私のために役立てなさい。」

「承知いたしました。私の真名は聖と申します。全身全霊を持って曹操さまと貴き御使いさまに仕えます。」

華琳の口元が若干ひくついてる。?艾の北郷に対する感情が予想の斜め上だったんだろう。

「そう言ってくれて嬉しいわ、私の事は華琳と呼びなさい。で・・・一刀、彼女は?また新しい女を侍らせているの?」

「いやいやいや、何でそうなるんだよ。この子は・・・」

「久しぶりです曹操さま。以前お会いしましたがお忘れですか?」

「鍾会?ああ、あの英才教育など莫迦な発言をした者ね。すっかり忘れていたわ。」

「・・・・・・。」

鍾会の顔が茹でたこのように赤くなる。

「一刀を相手させて悪かったわね、もう行っていいわよ。」

「おっおい華琳、そんな事言わなくても・・・」

北郷が華琳に話そうとするも、一睨みされて口を紡ぐ。

「華琳様。」

「烏涙、何かしら？」

「私は鍾会を推薦します。気に食わないでしょうが、彼女の能力は優秀です。必ずや役に立ちましょう。」

「そう・・・そこまで言うなら、鍾会をあなたの副将にしましょう。ただし。」

「態度の方は私が改めさせます。」

「分かっているなら早いわ。鍾会の態度が良くなるまでは私の前に出さないように。」

「御意。」

鍾会の態度を良くする。すごく根気が必要そうね、どのぐらいかかる事やら。

「それじゃあ私は厨房に行くわ。命、私の分はまだあるわよね？」

「はい。でも冷えてると思いますよ。」

「かまわないわよ。命が作ってくれた料理を無駄にするわけにはいかないわ。」

「華琳さま、私も行きます！せっかくだ、？艾も来い。」

「えっ？かまいませんが・・・」

「気にするな。姉者はいつもこの調子だ、お前と戦った理由は忘れている。」

「は、はぁ。」

？艾は腑に落ちないようだ。こればかりは慣れるしかないだろう、春蘭は理不尽の塊だし。

「烏涙ちゃんも来る？」

「いえ、残念ながら仕事が増えたからね。諦めるわ。」

「なら後で料理を持っていってやるよ。」

「ありがと。ほら、早く行かないと置いていかれるわよ。」

「おうっ。じゃあまた後でな。」

北郷達を見送った後、今まで隣で我慢していた鍾会がとうとう爆発した。

「うがーーー！よくもこの私を侮辱しよって！かなら、むぐ！」

「はいはい、うるさいから叫ばないの。」

「むが！ふむーー！」

もがきながら暴れる鍾会を尻目に、どうやって態度を改めさせる

か考えるが、

「できるかしら・・・」

態度の良い鍾会を想像するが違和感が多すぎる。

「もがーーーー!!」

鍾会の叫び声がむなしく響いた。

十五、　いざこざと試合（後書き）

想像以上に執筆が遅れました。本当にすみません。
次回も正直遅れそうです。

どんどん投降速度が遅くなっていますが、見捨てずにいたり、感想をくださるとありがたいです。

十六、　もどかしさと定軍山

「・・・・・・はぁ。」

ため息が口から出る、これで何度目だろうか。もし数えていたら三十近くは出しているかもしれない。

仕事は何時も通りこなしてはいるが、気分はどん底。

「ふむ、珍しいな。お前がそこまで思いつめるなんて。」

「！　奏、驚かさないでくれる、ノックぐらいしなさいよ。」

奏のいきなりの声に驚いたが、それよりも気配に気づかない自分に驚いた。

無言で肉まんを渡されたので受け取り、さっそくかじりつく。

香りで鼻を、味で口を刺激され、今更ながら朝ご飯を食べていない事に気づく。

「何度もしたが反応が無くてな。それで何について悩まされているんだ？」

「あなたに言える事ではないわ。」

そう、とても誰かに相談する内容ではない。

私の頭を悩ませる原因は『定軍山の戦い』だ。

その戦いでは夏侯淵が討ち取られる。そして先日、秋蘭と流琉と命の三人達が定軍山へと偵察に向かった。

何でも思い通りに動くわけでは無いと分かっていても、これはあんまりだろう。

本来、定軍山の戦いとは赤壁の戦いの後に行われる。しかしそれは正史の話でこの世界は違った。

迂闊だった。この世界では私や北郷を始めとした数多くのイレギュラーが存在する。ならば正史の順番通り戦いが起こるなどとは言い切れない。にも拘らずその事態を想定していなかった。

当然、この偵察に異を唱えれなかった。事前に準備をしていないため、偵察はするべきではないといえる情報を作り出すことは出来ない。私の前の知識を出すなど論外だ。

偵察は決定となったため、中止できる材料を集めようとはしたが時間が無さすぎた。結果、偵察を止めることはできず、秋蘭達の下へ兵を送る算段も今だ考えつかない。

せめてこれが『戦い』ならば何とか出来たかもしれない。秋蘭達が行うのは偵察、蜀は確実に奇襲を仕掛けてくるだろう。彼女達に奇襲が来るよと言えたら何と楽な事か。

いや、流琉は正史とは違いまだ生きている。典韋は張繡が謀反を起こしたとき、曹操を逃がし死だ。

なら・・・だめだ、この世界では張繡の謀反は起こっていない。だからこそこの偵察で殺されると取れる。

命は？定軍山の戦いの時にはいたか？・・・わからない、ただ助かる見込みは少ないことは分かる。

何度も考えても解決策を見出せない。このままでは魏は三人もの将を失う大打撃をくらってしまう。

これでは肝心の赤壁の戦いでの勝利が危うくなる。そしてなによりも命が・・・

「お腹が空いたわね。」

なんとも間抜けな話だ。考えるあまりに朝食を食べ忘れ、そこに肉まんを食べ空腹が増した。

腹の虫がくぅ～と可愛らしく音を出す。

「ふふふ、まだ肉まんはある。遠慮せず食え。」

「悪いわねほんと。」

「気にするな、それよりも自愛しろ。烏涙まで北郷のように倒れてもらっては困る。」

北郷が倒れた？　肉まんを頬張りながら考える。

「んっ。そういえば二日前に倒れたらしいわね。」

「ああ。もしかして見舞いにいってないのか？」

「ええ。ずっと考えに没頭していたわ。」

奏に飽きれ顔を向けられた。さすがに気を張り詰めすぎたみたい。

「今更だけど見舞いに行くわ。奏は？」

「行こう。北郷は未だに目を覚ましていないようだ。」

「二日間ずっと？何かの病気？」

「いや、診断によれば疲労が溜まっていたらしい。」

疲労？北郷にそんな様子は無かったけど気づかないうちに溜まっていたのかしら？でもどこか引っかかる。気にしても仕方ないわね。

奏と肉まんを食べ終え、北郷の部屋へ向かうが奇妙なものを見つけた。

「何してるのあなた達。」

春蘭や季衣、桂花の三人が北郷の部屋のドアに耳を当てている。

「しっ！とりあえず耳を当てて。」

盗み聞きは気が乗らないものの、桂花が真剣に言ってくるので私と奏もドアに耳を当てる。

「・・・俺達の歴史の定軍山の戦いは、」

「あなたの世界の歴史の話はするなと言ったでしょう。」

聞こえてくるのは北郷と華琳の声。なにやら北郷は焦っている様だがもしかして。

「秋蘭が死んでもか！」

「！　ど、どういう事だ！」

「春蘭さま、まず兄ちゃんの話を聞いてみましょうよ。」

焦る春蘭を季衣がなだめるが、季衣の顔は不安そうだ。

「俺達の歴史の定軍山の戦いは・・・劉備の部下になった黄忠が、夏侯淵を討つ話だ。」

私を除いた四人に衝撃が走る。皆、驚愕の表情だ。

「季衣、行くぞ！」

「はい、春蘭さま！」

「あ！ちょ、ちょっと！」

春蘭と季衣は一目散と走る。二人はすぐに兵を集め定軍山へと急ぐだろう。

「桂花、私は春蘭達の所に行くわ。」

「お願い。奏は霞と凪たちにこの事を伝えて共に兵の準備をさせなさい。」

「了解！」

桂花と奏のやり取りを聞きながら駆け出す。

「狗！狗はいる！？」

「ここにぃぃ！」

遠くから狗の声が聞こえたと思ったら猛スピードで駆けつけ、ピシッと敬礼のポーズをとる。

「烏涙さま、指示を！」

「聖と鍾会を呼びなさい！これから定軍山へ大至急向かう！」

「了解であります！」

急ぐ狗を尻目に再び駆け出す。

目指す場所は馬小屋。

春蘭は・・・いた！季衣と一緒に馬で出発するところだった。

「春蘭、季衣！止まりなさい！」

「邪魔をするな！秋蘭に危機が迫っているのだぞ！」

「流琉も、命だって危ないんだよ！」

「二人とも落ち着きなさい。せめて最低限の準備をしないと三人を助ける前に死ぬわよ。」

周囲を見ると出発の準備をしている兵をちらほら見かける、準備を終えた者から着いて行く予定なのだろう。いつもの春蘭ならありえない雑な命令だが、それほどまでに動揺しているということだろう。

「くっ！しかし秋蘭たちが！」

「あの三人が簡単にくたばるはずが無いでしょ。それと、今部下に聖を呼ばせているわ。彼女がいたほうが秋蘭たちの下にすぐにたどり着けるはずよ。」

「・・・ふぅ、わかった。しかしなぜ聖がいたら早く着くのだ？」

「ほら春蘭さま、聖は地理が得意から・・・だよね？」

「まぁ大体そんな感じよ。それより早く準備を進めるわよ。」

「うん。みんなー！命令は変更ー！」

季衣が兵達に指示を与える。急に命令を変えられても淀み無く隊列を組み始める彼らの姿は非常に頼もしい。

「烏涙、お前も来るのか？」

「そうよ、本隊が追いついたとき円滑に事を進めれるよう場を判断する為の軍師が必要でしょ？それに軍師の中で一番腕が立つのは私だしね。」

まあ一番と言っても私のように武も立つのは基本見かけないのが普通だ。あえて一例を出すなら呉の呂蒙ぐらいか。

「そうか。お前なら守る手間も省けるだろうからな。・・・しかし聖はまだ来ないのか！」

「もうそろそろのはず「烏涙さまーー！つれてきましたーー！」やっと来たみたいよ。」

「ようやくか！季衣、準備は終えたか！？」

「ほぼ終わりました！まだなにか必要な事はあります！？」

「馬を四頭こちらに回してちょうだい！」

「わかったー！」

準備は予想以上に早く済んだようだ。狗たちには移動中に細かい説明をしよう。

◆

「敵軍は三人もの武将を打てる絶好の機会なんです。ですから逃がしまわないよう森の中ではなく、広く見晴らしの良い場所へ追い込むはずです。」

「じゃあ広い場所に流琉たちがいるってこと？」

「はい。細かく説明すると森と平野の境目にいると思われます。

今その作戦に適した場所を探しています。」

私達の前では聖たちが話し合いをしている。聖は騎乗しながら地図を読むという荒業をやってのけている。話を聞く限り、聖の能力は存分に活用されている。大変喜ばしい。北郷にぞっこんでなければだが。

そうそう、今度北郷になにかおごってあげよう。あいつが三国志の知識を引き出してくれたおかげで何とかできるかもしれない、おごってあげれる内におごってあげよう。

それはともかく、命たちを救うのは当然として私はどう動こうか？

正直定軍山の戦いで出てくる将は黄忠と夏侯淵しか覚えていない。だけど聖が言う通りならば蜀は騎馬隊を用いるはず、なら一番出てきそうなのは馬超か・・・

駄目だ、何も思いつかない。念のため狗と鍾会を連れてきたのが無駄になりそうだ。一応何時でも動けるようにしておこう。これから起こる事は史実との乖離、どこか利用できるかもしれない。

「鍾会。」

「なんだ？」

「もしかしたらあなたに兵を率いて貰うかもしれないわ。当然、できるわね？」

「あたりまえだ、この私が出来ないはずがなかろう。」

「鍾会殿！少しは烏涙さまを敬う気持ちは無いのですか！」

「ふん、十分敬っているさ。犬には分からないだけだ。」

私にも分かりません。後から分かった事だが、鍾会の不遜な振る舞いは意図的にしているわけではないらしい。ただ小さいときからずっとそのように振舞っていた為、癖になってなかなか改めれないだとか。

「春蘭さん！秋蘭さん達がいると思われる場所を数箇所見つけました！」

唐突に聖が声を上げる。その言葉はここにいる皆が待ち望んでいた内容だ。

「よし！なら聖、お前は先頭に任せる！案内をたのむぞ！」

「わかりました！」

聖が先頭に立ち、皆が続く。かなり早かった進軍速度がさらに上がる。

「二人とも、私達も急ぐわ。秋蘭と流琉は春蘭たちがなんとかするでしょう。鍾会、命の救出に力をいれるわよ。狗は到着次第後方待機、いつでも行動が取れるようにね。」

「わかった。」「了解であります！」

せっかくのチャンスだ。せめて命だけでも助けてみせる！

◆

「みんな・・・げほっ、だいじょ、ごほっ！」

僕の隊の被害を確認しようとするけど、咳でうまく喋れなくてとてももどかしい。

「命さま！我々よりもまず自分のお体を心配下さい！」

「ごほっごほっ、ふぅー。これぐらい僕なら大丈夫だよ、それよりもみんなは！？」

いつまでも咳をするわけにはいかず、急いで息を整える。最初はただの偵察だったのにまさか蜀から襲撃されるなんて・・・秋蘭さんと流琉ちゃんはどうなったんだろう、逃げる途中ではぐれてしまった。

「秋蘭さまと流琉さま達の安否は分かりません。命さまについてきた兵も・・・多いとはいえません。」

「そう・・・手ひどく、げほっ、やられたみたいだね。」

弱気になりそうになるけど耐えなくちゃ。僕がしっかりしないと部下に示しがつかない。

そう活きこんでいたら遠くの方から「うおぉぉーー！！」と声が聞こえてきた。

「命さま！」

「うん。向こうの方にみんながいるみたい。」

向こうで秋欄さんや流琉ちゃんたちが戦っているんだろう。でも途中ではぐれた僕達でさえかなりの被害、向こうは壊滅的なんだろう・・・

「ねえ、ちょっといいかな。」

「なんなり・・・えっあの、馬から降りてなにを?」

戸惑う兵士をよそに馬から降り、手綱を手渡す。

「君は逃げて、曹操さまに蜀から襲撃されたことを伝えて。」

「し、しかし命さまはどうなされるのですか!?」

「僕は秋蘭さん達の所へ向かうよ。はやく、けほっ、加勢しなくちゃ。」

「無茶です!」

「無茶でもっ!ごほごほごほっ、無茶でもなんでもないよ。僕が逃げたって途中で倒れちゃうだろうからこの事を伝えれない、ぐほっげほっ!。」

「わ、分かりました!せめて少しの間でも休んでください!幸い敵兵はいないようですし、」

「ここにいるぞーー!!やっと見つけたよ!」

！　こっちに来るなんて、まさか秋蘭さん達は・・・

「早く逃げて！」

「はっ！命さま、どうか御武運を！」

「あっ！逃がしちゃだめだよ、追いかけて！」

「「はっ！」」

邪魔はさせない！弩砲の狙いをさだめ、一人目に撃つ、狙いは胸！

「ぎゃ！」

断末魔と共に敵兵の胸が大きく抉れる。

「ひぃ！」

怯んでいる隙に第二射。顔を狙うも馬の頭に命中してしまった。しかしそれでも矢は勢いを衰えさせず、兵の頭に命中する。首のない馬と首のない兵の死体が完成し、倒れる・・・僕が。

「なっなにそれ、矢の威力じゃないよね！？　それに何で倒れてるの！？　え、えと・・・もしかして死んだ？」

「げほっげほっ、生きてるよ！」

「きゃあ！動いた！」

咳をしながら起き上がったら何故か怖がられた。しっかりと構え

ていなかったから弩砲の衝撃がきつかった。今の疲弊している自分じゃあ辛かったみたい。

「僕の名前は郭伯済、君は！」

「た、たんぽぽは馬伯瞻だよ。それよりも大丈夫？すごく顔が青いよ。」

「心配、ごほっ、無よ、げほっぐほっ、無用だよ！」

敵に心配されるなんて・・・絶対馬鹿にされてる！必ず見返して・・・

「ごほっ！」

「吐血した！？ちょっと、戦う前から死にそうだけど！本当に大丈夫！？」

周辺にはなんとも言えない空気が漂っていた。

十六、　もどかしさと定軍山（後書き）

非常に遅れて本当にすみませんでした。

あえて言い訳をさせてもらうなら、アイデアや頭で思い浮かべた事をなかなか文章にできない、てっとり早く言うならスランプです。

次回は一週間以内に投降するのを目標としてがんばります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8222u/

私は何ぞや

2011年8月29日01時08分発行